毎月十日廿五日發行

家庭雜誌

壹冊定價金五錢



明治二十九年六月二十五日發兌

第八拾號



○小兒○はよく肥へて笑ひ顔の愛らしき筈のものなり痩せたる小兒は興味尠きものなり之れには彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸とを配合して飲み易く且つ味ひよく製造したる

スコット乳菓が最も適當なる食料にして忽ち肉を肥し發育を助くるなり◎此の乳菓が滋養分に富むとは他に比類なきが故に虚弱なる人々は之れを用ゐて奇効を見べし

特に虚弱なる婦人は一度之れを服用せば忽ち健全なる身躰となること疑なし

○咳嗽及風邪○は病の初めなり、次に來るものは肺の衰弱にして身躰を瘦せしむ、最後に彼の恐るべき肺病の萠芽を顯すなり彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸の調合物なるスコット乳菓は能く咳嗽及風邪を去り肺臓を強くして活力を與ふること實に驚くべし◎◎◎此の乳菓の洪大なる滋養分が嬰兒、小兒及虚弱なる母親を益すること實に大にして、其味も至て滋味なれば喜で服用するなり

此の乳菓が精氣を増し滋養分多く最も効驗あるものなるは世界の大醫の擧て證明するところなり

○スコット乳菓の説明書御入用なれば横濱八十九番日本支那貿易商會へ此の雜誌にて御承知の旨御申越あれば無代價にて呈す

左の大取次所の外各藥舖にて賣捌き居れば御購求ありたし

横濱境町	友田嘉兵衛
仝境町	鳥居徳兵衛
仝太田町	大川佐兵衛
東京本町四丁目	島田久兵衛
仝室町	資生堂
仝本町三丁目	島田忠兵衛
大阪道修町二丁目	小西儀助
仝道修町二丁目	武田長兵衛
仝道修町三丁目	田邊五兵衛
仝道修町二丁目	田畑利兵衛
仝道修町二丁目	福田清右衛門
仝道修町二丁目	鹽野儀三郎

◉本號の口繪は米僊畫伯の筆に成る毘沙門の像を掲ぐ

◉本號には英國ジェルシー伯爵婦人が殊更に本誌に寄せたる英詩を掲ぐ

◉本號の時事中には樺山陸奥兩伯の肖像を挿む

第二 一語千金

定價五錢 郵税二錢

歐米名家が、片言隻語宇宙の眞理を說明し、造化の秘奥を闡明し、以て誦すべく、以て歌ふべく、咀嚼愈ゝ精なれば興味愈ゝ深し、所謂る一語千金なるもの、此書が如何に有益にして、江湖諸君の愛好に投じたるかは、第壹一語千金が既に八版を重ねたるを以て今更ら呶々を要せず、今や部門、躰裁總て同一なる、第貳一語千金を發刊せり、乞ふ愛好の諸君一本を坐右に供せよ

夏季愛讀民友社出版書籍要目

書名	定價	郵税
家庭の和樂	十錢	二錢
夏の家庭	十錢	二錢
簡易料理	十錢	二錢
家庭衛生	十錢	二錢
海の日本人	十錢	二錢
簡易生活	十錢	二錢
娛樂俱樂部	十錢	二錢
歷史の片影	二十錢	四錢
近松門左衛門	十八錢	四錢

書名	定價	郵税
第一國民小說	十五錢	四錢
第二國民小說	十五錢	六錢
第三國民小說	十五錢	四錢
第四國民小說	十五錢	四錢
第五國民小說	二十錢	四錢
第六國民小說	十五錢	四錢
風雲漫錄	十五錢	四錢
征塵餘錄	十五錢	二錢

東京市京橋區日吉町四番地

發兌元 民友社

本社電話番號七十番

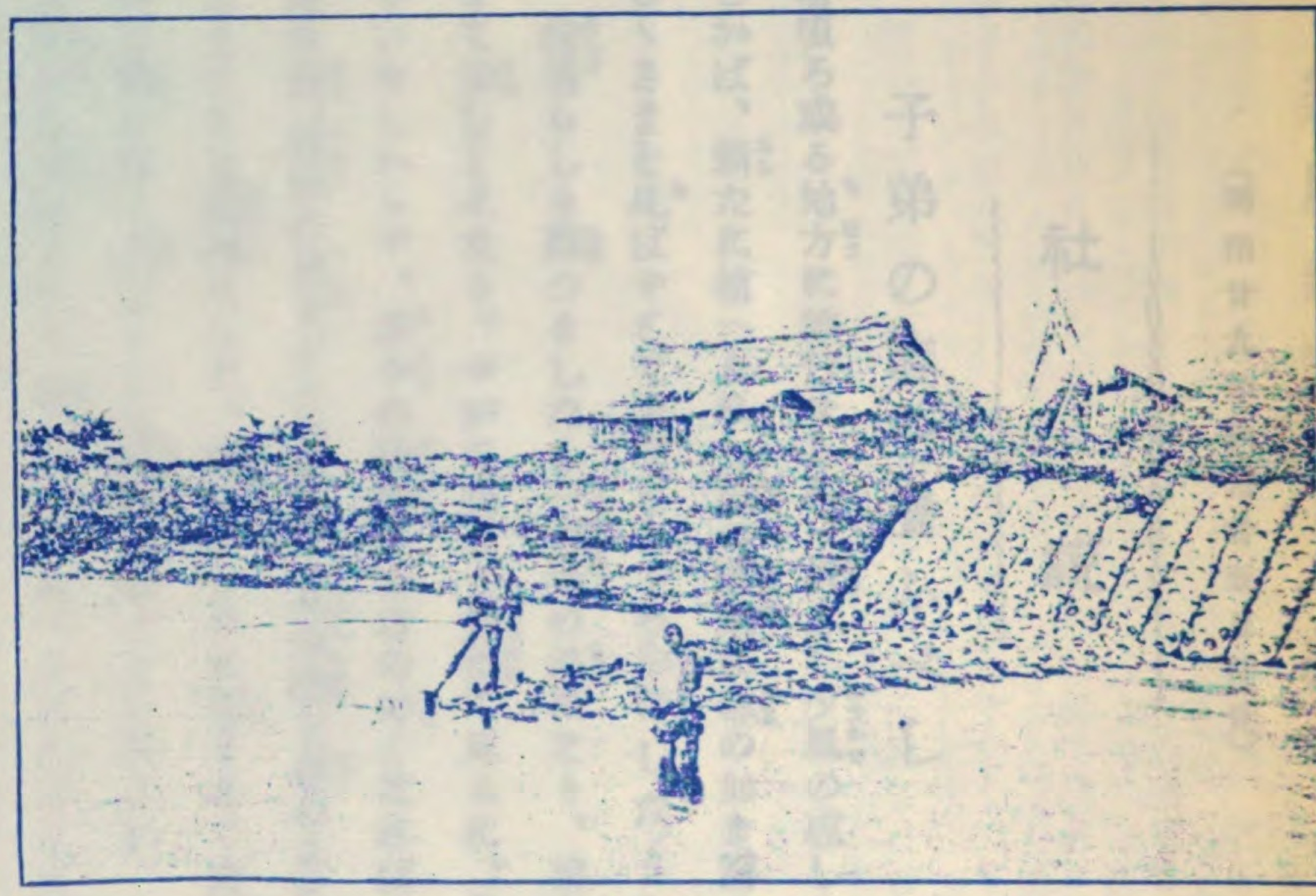
發行兼印刷人 吉崎圓吉
編輯人 金子佐平

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

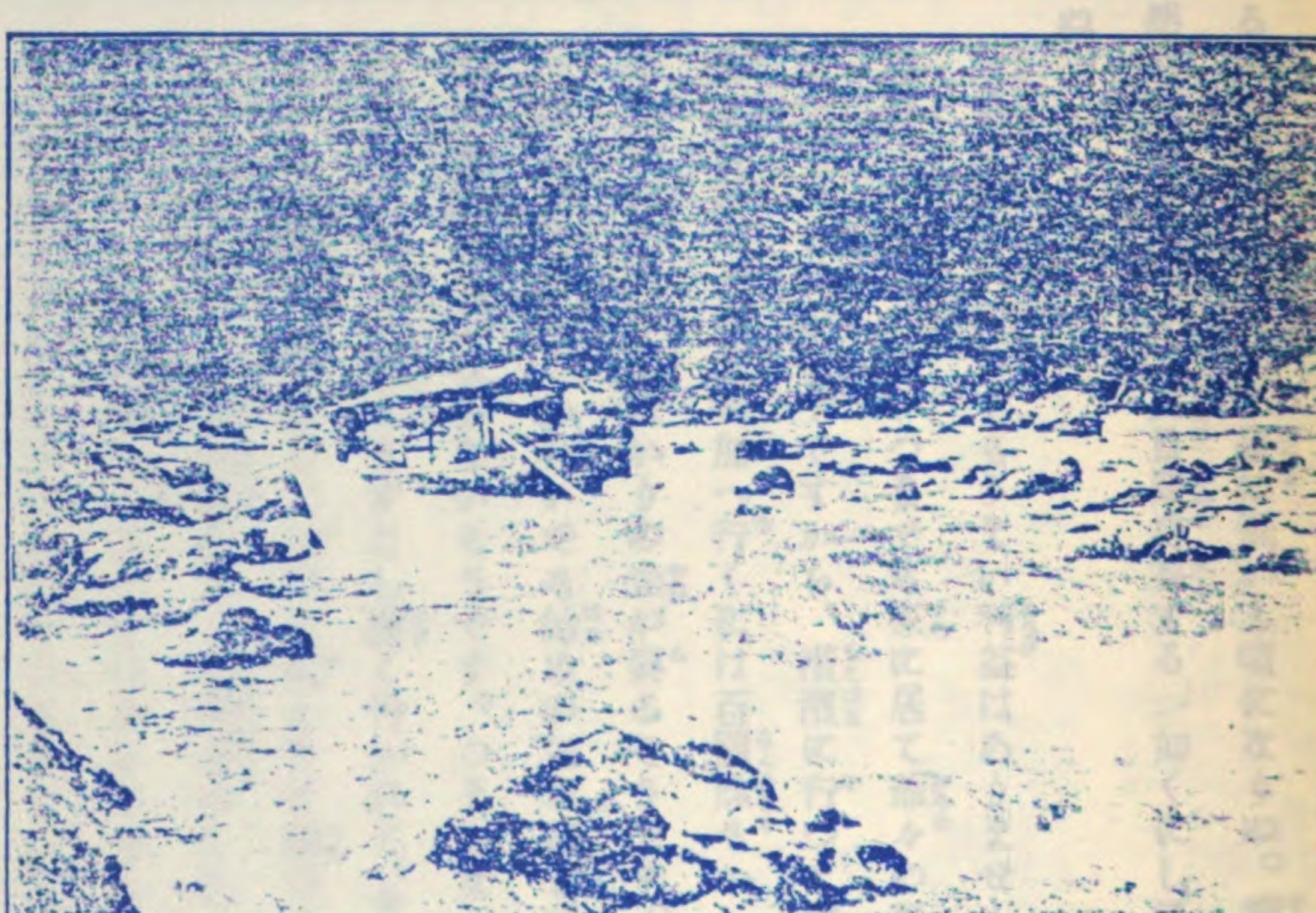
明治廿九年六月廿五日發行

家庭雜誌第八拾號

目錄



多摩川鮎漁



保津川急流

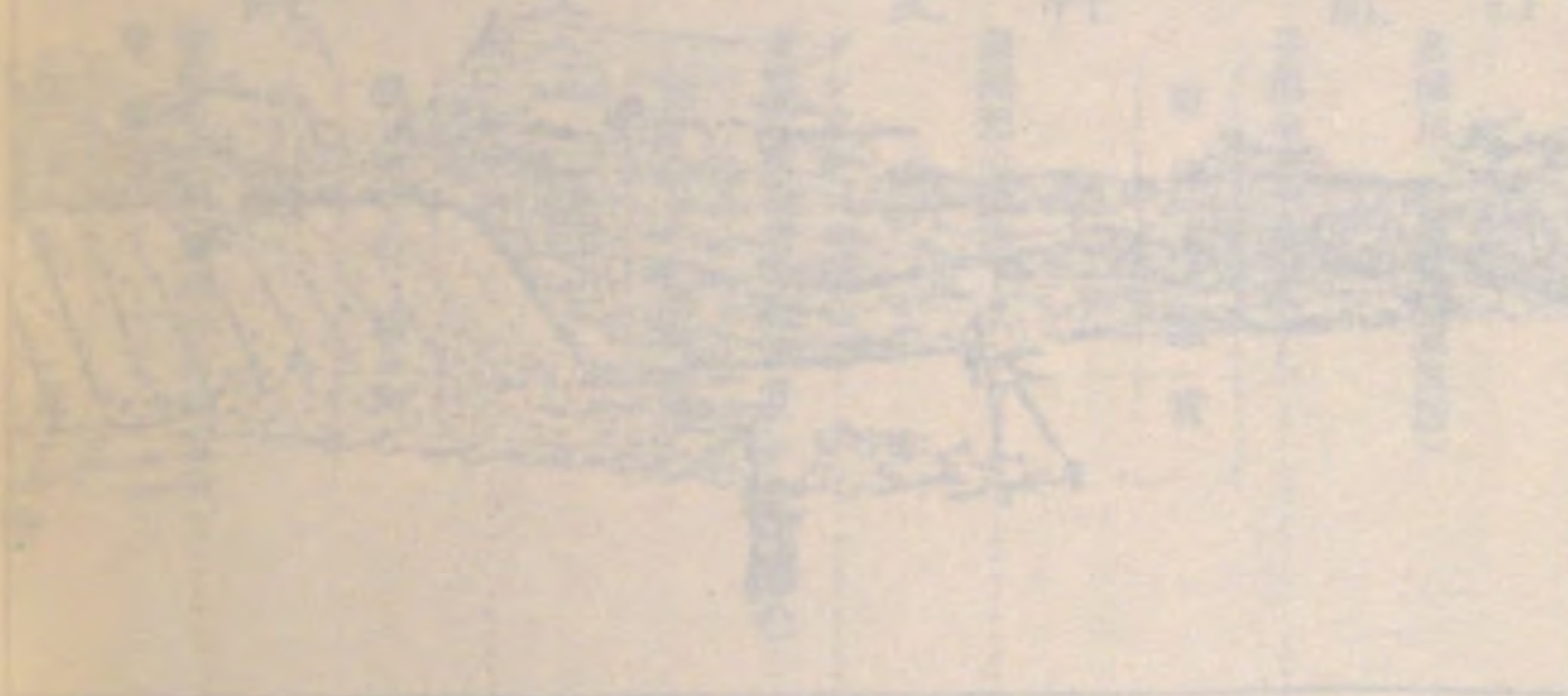
小川一眞寫眞彫刻銅版及印刷

[illegible]

家庭雜誌第八拾號

目錄

[illegible]



[illegible]



[illegible]

家庭雜誌第八拾號
（明治廿九年六月廿五日發兌）

社說

子弟の志を養ふべし

記者頃ろ或る地方に旅行せしに、折ふし夕風の涼しかりしかば、新たに植へられし稻の若葉に珠の如き露の滴るゝさまを見ばやとて田間をそゞろ歩行したりしに、俊邁らしき顏つきしたる一青年の後になり、前になりて歩むを見たり。やがて物など言掛て見るに、言葉もいやしからず、多少の敎育ある者の如くなれば、此處の森、彼所の堤などを指點して其來歷を尋ぬるに、答ふるさまも朧氣ならず、帆席を夕日に照させて向ひの川を棹し行く舟をさして運輸の事どもを問ふに、それは我父の業なりとて詳に答へぬ。なにとなく此青年の愛らしく覺へて猶樣々の話しに夕陽既に西山に入るを覺へず、葦の上に螢の飛かふ頃になりぬ。青年突然我に問ふが如く、又自問自答するが如くにして曰ひぬ。

此頃は西洋へ行つてもうまい利益はありませんね。旦那。此間私しはいつまでも家に居て爺々の厄介になつて居るのがいやですから、横濱に行つて聞いて來ましたが。亞米利加へ行くには百圓餘もかゝり。それに別に六十圓ばかりの金が要るそうです。それで向ふへ行つて、かせいでも始めの三年ほどは月に十四五圓にしかならないそうです。つまらないじやありませんか。私ももすこし廉く行かれて、そして、もすこし殖ることなら、行つて見ようと思ひましたが止めました。旦那此節ぢやァ世間並のとをして居たのぢやァ、一生浮み上ることはありませんや。何か人のやらないことをやらなくつちやァ、ねえ旦那。

こゝは東京を去る數十里の邊土なるに、冒險勇往の氣象は早く青年の中に入りぬ。世の中は三日見ぬ間の櫻なるかな。日本の村々にはかゝる青年多かるべし。運命を萬里に開拓せよなどゝは我等が日毎に口癖のやうに曰ふ所なれど、こはかゝる青年ありて後始めて行はるべき經綸なりと思ひければ、余はいたく青年の雄志をめでゝ其前途につき、思ふことどもを語り、やがて袂を分ちて逆旅にかへりぬ。

因て思ふに青年の間にかゝる氣風の起り來りし時は勢ひ因循なる古老と新進なる青年の間に意見の衝突を生じ、青年に其家庭を面白からず思ふの心を起さしむるが如きとなからずやは。好箇の青年をして世上にさまよふ浮浪とならしむるも、乃至堅固なる志を抱きて鄕關を出で錦を着て歸るを期する正經なる勉强家とならしむるも、唯此境に在り。世の父兄たるもの、其子弟の志を養ふことを勉めよや。

一種の懸賞

南洋馬尼拉市街には春來放火多く本年四月三日の如き半日餘りも燃え續きしほどなるが右は各所の無賴漢どもが政廳より一回百圓にて請負ひ放火したるものなりとの噂あり餘り法外の話しのやうなれど仝地は新築の家屋に對し大小廣狹に應じて三圓以上の免許料を納めしむるの規則ありて新築多ければ政廳の收入自ら增加するが故に斯くは放火を指嗾するものとぞ尤も放火が發覺して死刑に處せらるゝも其は請負人の不幸に屬して指嗾に責無きは奇態な行政なるかな

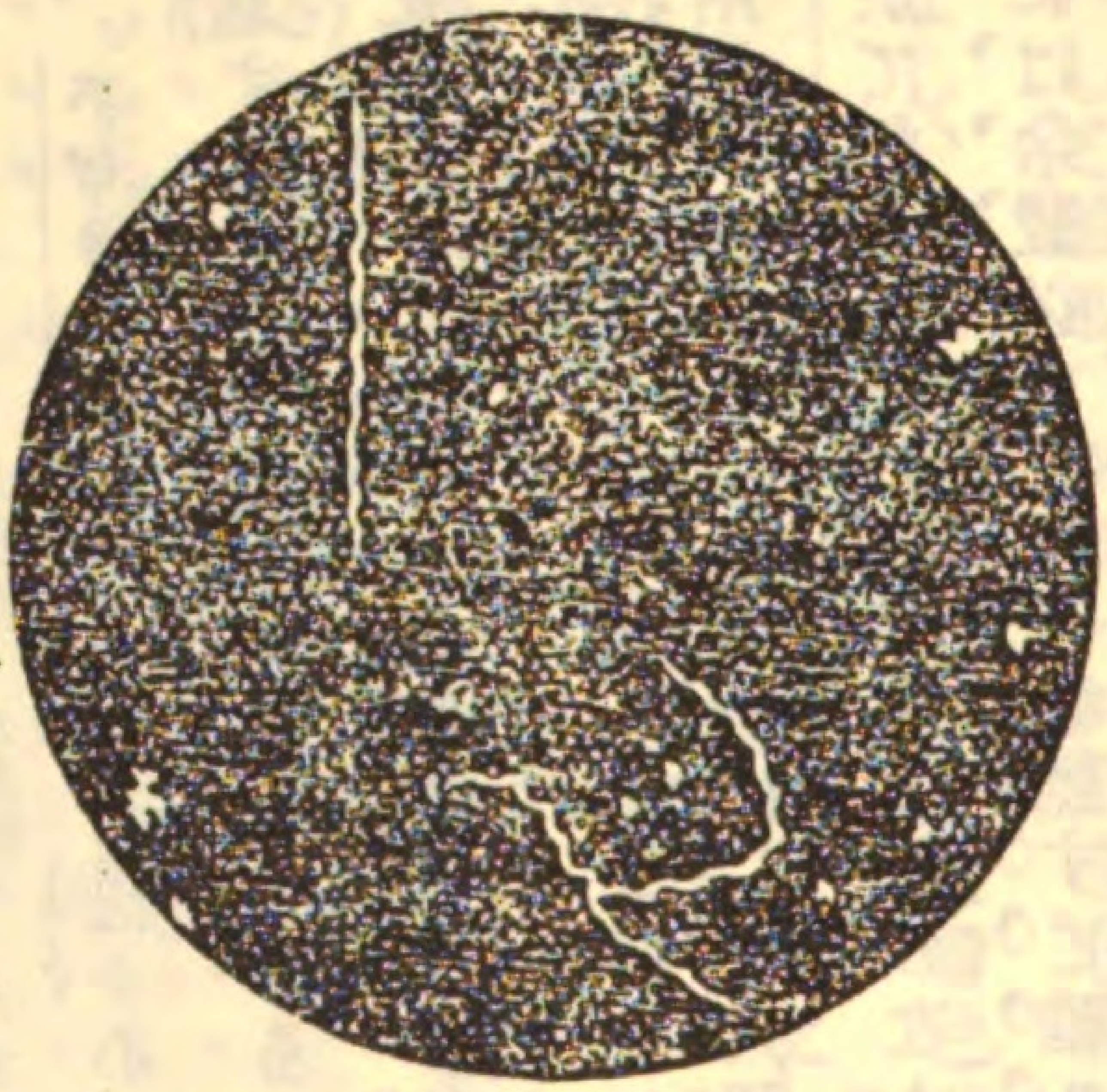
科學

回歸熱の黴菌

市村塘

回歸熱といへは、何だか日本人には耳新しく聞ゆるは、近頃始めて外國より到來せる故なるべし、然るにこは獨逸國に於ては既に二十四五年以前より人の注意

せし熱病にて、Rückfallfiebenといへば誰知らぬものもなき回歸熱のとをいふなり、されば其病源發見（寧ろ確定？）も遠く千八百七十三年代にあり、其發見者獨人オベルマイエル氏名譽紀念の爲め、コーン氏は其黴菌をスピリルム、オベルマイエリーと命名したり、通常 Spirochaeto obermeieri といふもの是なり、圖に示せるは其千倍の廓大形とす。



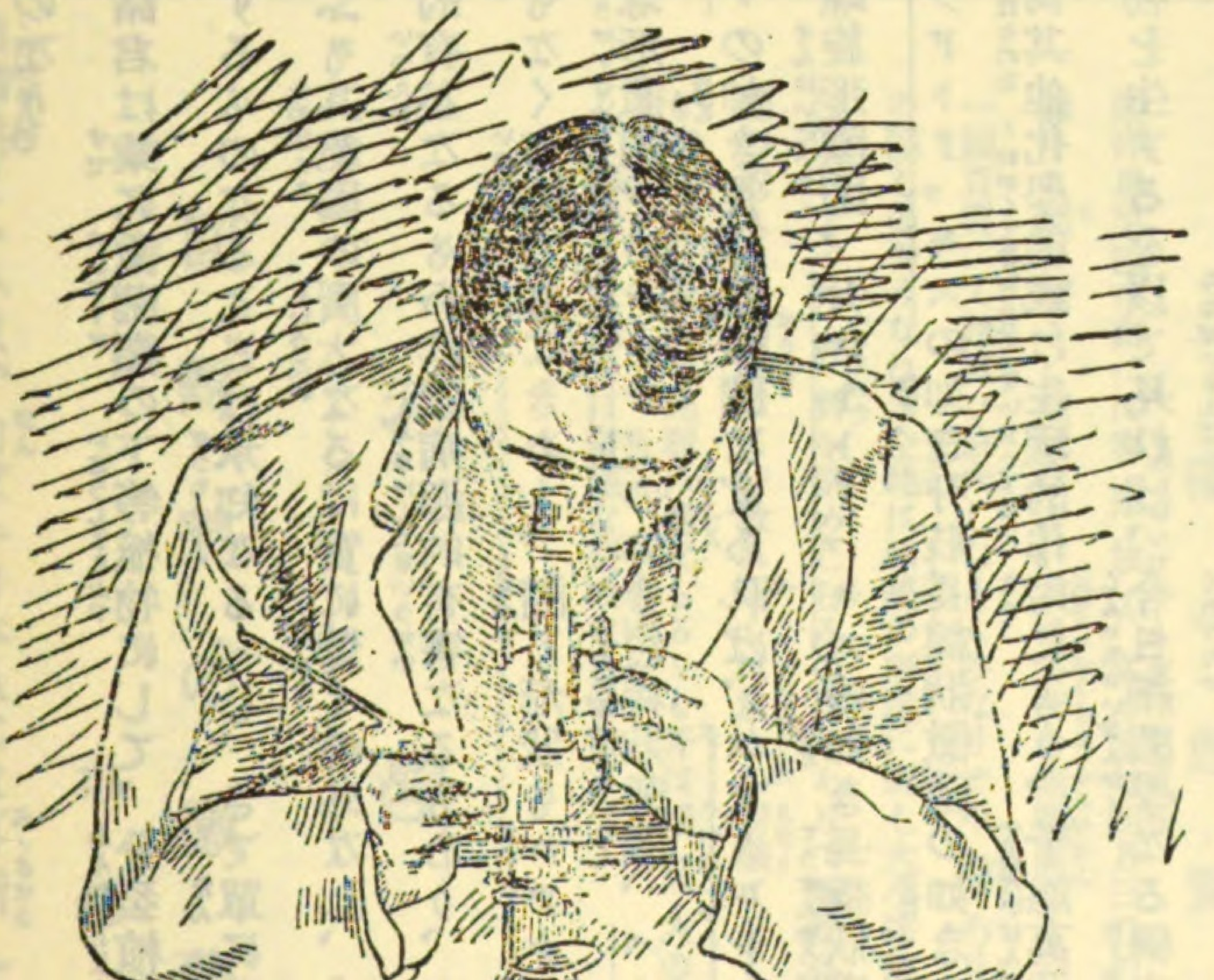
回歸熱患者の血液中に存在せる螺旋黴菌を四倍の顯微鏡にて窺ひたる圖

都下漸く該病の蔓延する氣味あるに連れ、世の細裙たる人も、何時おのが家族へとつゝくかも知れざれば、其豫防法及び患者取扱ひ注意等に關しては、最早新聞紙などにて、篤と熟讀了知せられたとならん、因て余輩は今一歩を進めその序に、諸君の腦裡へ此黴菌の科學的性質をも、壓入し置かんと欲するものなり。

諸君は業に黴菌類の下等植物にして、分裂植物科に屬するものなることは承知なるべし、さて單に黴菌といふも其範圍の廣大なるは實に驚くの外なし、或は工業的有益なるもあれば病源的有害なるもあり、又有益でもなく有害でもなきあり、隨て形狀もコッケンの如き球形黴菌、バチルレンの如き短桿狀黴菌、バクテリエンの如き長桿狀黴菌などあれば、スピリルレンの如き螺旋形黴菌、レプトトリッキスの如き長線狀黴菌、クラドトリッキスの如き分岐長線狀黴菌の如きもあり、尙其他化學的或は生理的作用により、千態萬狀の中間物を生ずるを以て見れば、今日細菌學なる獨立學問の起る所以も、皆黴菌範圍の廣大なるを指示せるにあらずして何ぞや。

諸君の嫌へる肺炎、虎列刺、腸窒扶斯などは、皆パチルレンの所爲に係れども、夫の回歸熱の黴菌に至つてはスピリルレンに隷するものなり、即ち圖に見る如く螺旋形を呈せり、スピリルレンの内にも種々ありて、余輩の齒糟に棲息するもの、腐水に簇生するもの等有害者無害者ともに混合す、今左に回歸熱黴菌の特性に就て聊か詳述せんと思ふ。

そも、該黴菌は兩端尖鋭なる螺旋生物にして人間回歸熱患者の血中に於て頗る活潑に運動するものなり、而して熱の發作期には余輩必ずこれを視認すと雖も、休歇期には之を見ず、後期に於て少數ながらも視認し得たる人は唯ナウンイン氏あるのみ、その人工培養に至つては未だ何人も成効せしとなく、又芽胞も不明なり、然れども卓越なる我邦專門家のあるあり其研究報告に接するの時遠きにあらざるべし、兎に角バステルナッキー氏の實驗に由れば該黴菌は攝氏零度の水蛭躰中に十日間は生活し得るといふ。


黴菌研究の圖

動物注射を試みるに只猿のみは相應に感染するが如

し、コッフ、カルテル兩氏の試驗せしところにては注射後發熱迄に三日半を要し、唯一回發熱するのみにて、人間の如く數回發熱するとなしとのとなり。黴菌は其儘顯微鏡下に窺ふも決して其形狀を確視し得るものにあらず、必ずや染色法を行ふに定まれり、いま回歸熱黴菌に注浸するに鹽基性アニリン色素を以てせば着色し得べしと雖も、グラハム氏着色法と行ふも着色するとなし、玆に專賣特許の最良着色法ともいふべきはギユンテル氏が、自今十年前に世に公にしたる血液プレパラート製造法とす、則ち先つ該黴菌の群住せる血液滴を對物硝子の面に抹塗し、其乾燥固定するを待ち、1-57の稀醋酸水熔液にて、奇麗に、赤球中のヘモクロヒンを洗掃し去り、更に血漿の大部を硝子面より洗ひ落すなり、併し其固定黴菌も同伴除去せざる樣注意が肝心、後再び乾燥せしめ始めて是をアニリン色素にて着色するにあり、圖に示せるフクシンにて着色したるものとす、斯くして其裝置硝子を顯微鏡に照せば血球を裸躰の輪廓のを存し、黴菌は依然着色して瞭然其形狀を視認し得るなり。

不覺不識、自分ながら、ちと深入り過ぎたる心地す、先づこゝいらが筆の擱きどころなるべし。(了)

都人と田舍漢

都人「どうだい世の中は重寶になつたれ、卷煙草一本吹かす間に品川まで行けるよ

田舍漢「重寶だが卷煙草一吹の間で四錢たア高けいもんだな。

史談

わしんとんの妻（二）

中野三鷹子譯

其寡居の日に於て、ウーランストーンといへる畫師を呼んで描しめたりといふ、夫人の肖像今猶存在せるもの

に就いて見るに、夫人は中肉中肩、むしろ小柄といふべきなれども、格好誠によく、才氣おのづから其かんばせに顯はれたり、やゝ黒みを帶たる褚色の髮とくるみ色の瞳とは、共に美といふにあらざるも優に可憐の質を含めり、實に夫人は米國南方の婦人の通性なる氣敏にして人をそらさぬたちに尤とも富しとぞ。

結婚の後ワシントンは、諸般の公務蝟集して、身に多くの暇とてはなかりしも、三ヶ月は家に留まりて其ホチムーンを樂めり（結婚後暫らくは旅にいで又は其他の手段にて所謂差むかひに情を暖む、是西洋各國の風俗にして日本にはもと〳〵なきこと、是をこれホチムーンとはいふなり）是實に同人の余に給ひたる恩惠なりと、後年ながくワシントン自から人に語りて喜こびしとぞ、然るに月日は流れ行く水のそれより早く、いともたのしき同棲の時日いつしかに終りければ、夫人は其携帶の二兒六才の男子と三才の女子とをつれてベルノン山の麓なる田舍の家（ワシントン其義兄より讓り得たる住家なり）に引籠り、ワシントンは即ち公けの務に行けり。かくて其務にあることや、暫らく、百事いよ〳〵其緒につきたりしかば、ワシントンは茲に其最愛の人と共に睦まじく家庭の樂を擅まゝにする幸を得るに至れり、其時その親戚の一人に送りたる手簡のうちに、余や善良の妻をむかへたり、誠に百年の苦樂をとも〳〵すべしと信ず、今や更に露程も内顧の氣遣なしとかけるによりても大樣夫婦の中らひ如何にありしかを思ひやるにかたからず（適ばれの名細君、かゝる内助を得たるワシントンの倖びはそれ何許ぞ、誠に妻は第二の我身撰びたる上にも亦撰ばざるべからず、さればこそ悪き妻を持てば五十年の饑饉に逢しに等しといへる我國の俗言、誠に卑近なる言なれども味はひ見ば大に面白き處あり、此傳記單に婦女兒の爲のみにものせしならず）

生活の程度は英國に於ける中流田舎紳士のそれ等のごとく、實につゝまやかにして更に奢らず、唯々時に馬を郊外に馳せ、あるひは兎を屋後の小山に狩り、又は月夜端艇を流れに漕ぐなどを以て無上の樂となす、時には自から野に出でゝ菜蔬の園を耕やかすことさへありしといふ。

夫人の持來りたる諸什のうちに、いと美しき一輛の馬車あり、黒人の御者これを司どる、されども夫人は寧騎馬を好み、日曜日の外は多くそれにのらず、大抵は夫婦とも〳〵轡を列て各所にゆけり。

琴瑟尤和合して鴛鴦のふすまいと暖かく、朝雲行雨の樂げに淺からぬ處計ずも變事の報は傳へられたり、當に是清朗風すゞしき夏の夕暮、忽にして滿天の黒雲世に美しき白銀の月をかくし、電光亂射百雷一時に碎け、急雨盆を覆へし來る凄まじの有樣にもたとへんかな。

そは米國の歴史に於て尤も有名なるスタンプ、アクトの破裂にして實に米國大革命の導火なり。

英國の政府其頃は内外の多事によりて費用大にかさみしかば、種々樣々と其收入の方法を考へ、四方八方に其稅源を開き、遂に米國にまで及ぼし、重き稅を課せんとせしに、擧つて其苛酷に怒り、たとひ如何樣なることあるも、誓つて本國（英吉利のことなり）の命に應ぜずと決定し、其第一の示威としてマサッセッチユ州の港ボストンに來泊せる英國船に亂入して、一場の鬪諍を演じければ、其報忽にして本國に達し、上下ともに騒ぎたち、とりわけて時の帝王ジョルヂ三世の逆鱗ふかく、事態いよ〳〵不穩となりぬ。

かゝる時に當りてや、苟も其籍を米國に置く人にして、誰かそれふるひ起ざる、老耄の人も幼稚の兒等も大に〳〵ふるひたち、其無法なる大敵に當らんと心構への雄々しさは、諸子それ清國膺懲の日に於ける我日本に

くらべ見よ、されば思半に過ぎん。況んや愛國義心ジョルジワシントン其人の如きいかにぞや振ひ出ざる、決起一番彼は温かき家庭を捨てゝ去れり。

時はこれ一千七百七十三年の事なりけり、ウィルアムスパークといへる地に於て樣々と英國に對する事を評議し、ワシントンの身は事の外忙がはしき折しも、尤とも驚くべき報らせは夫人の許より傳へられたり。今しもやゝ年頃に達しぬる夫人携帶の少女病にかゝりていとも危ふきとの由、日頃滿身の愛を傾むけていたわりたりしものゝことにしあれば、ワシントン何狀驚ろかざるべき、暫くは公事を捨てゝやがて家路に取急ぎ、慈悲なる繼父はその病床の傍に跪まづき熱心に平癒の祈禱を捧げたりしも、如何せん命數の玆に盡ぬる事の悲しさよ、其祈禱の終ると共に少女三寸の呼吸は永しなへに絶えて又今更に歎けども能はず、呼べども歸らず。

少女は色やゝ黒く母の戯れに黒姫御と字づけし程なりしも何處となく愛らしく、かんばせ甚はだ其父《カスチス》に似て、全躰もつとも華奢、あまり弱々敷に母も大に氣遣しが、悲しいかな、其氣遣は今や誠の事となりけり、性質温和にして繼父ワシントンを慕ふこと其生父の如くなりければ、ワシントンも亦現在の我子の如くもつとも鍾愛せしなれば、宛然に掌中の球を奪ひ去られたらんが如し、悲歎殊に深く何事も手につかざるの思なり。

ダンモアといへる人と共に、西部諸州を遊説すべき約ありしもワシントンは歎きに沈める其妻を捨てゝ去るに忍びず、暫くは家に留まりてそを慰め日漸く遠くして後初めて其事に着手せり《此ことについて或は私のために國の事を忘れしなどいふ人も亦あるなるべし、されどもそは誠に一を知て其二を知らざる近視眼者の

非言にして、もとより取るに足らざるなり、古來其家庭に情薄き人にして公事に熱心なる人はあらず、其子を煮て君に食はしめたる易牙を近づくべからずと、管公にすゝめたりし管仲が言などよく〳〵味わひ見るときは大にさとる處あるべし、滔々たる僞善者の批難なんぞそれ聞くに足らんや》

夫人携帶の二兒の內少女こそかくも溫和なるに、男子はこれに異なる節多く、義父が心に逆ふことさへも少なからざりければ、ワシントンも是がためには大に其心を惱まし、余は人を治め能ふといへども、實子供を治め能はずと歎ぜり。

誠に〳〵さもありなん、なさぬ中の義理ある子なれば、心をいためしも實にさることゝ思ふなり。

此氣儘なる男子其名をジョンといひ、今や少壯の齡に達せり、少女の死に先だつこと二年、父はそを或田舍寺院に伴ひ行き、僧侶にそが敎訓のことを囑托せしに、少年は更に是を喜ばず、百方其母を說いて遂に其同意を得、茲を去つて遠く他に出でゝ學ばんと企てしと偶々義父かへり來りてこを耳にし、以ての外の事なりと、大に其事の非なるを論しければ、母はいふをまたず、少年も大に其言に伏し、全く思ひとまりしにはあらねども、やゝ其事をとゞむるに至れり。

此頃に至りては少年又々其父母の意にそむいて事を企てたり、其近傍なるカルバードといへる人の娘今年十六に達せるものと深く約し其の結婚の許を母に乞しに《早熟何ぞ夫義父に似たることの甚だしきぞや》母其事のあまり早過たるを以てこれを諭し《少年此時わづかに十八歲なり》父ワシントンは寧ろ其結婚を喜ばず、百方これを戒しめ志も、少年のこゝろ中々に固くして容易は動かすべくもあらざりければ、漸くにして其同意を表せしも、今といふては是を許さず、ニユーヨルク州なるキングスコレッヂに於て二ヶ年修業の後、初

めて其式を擧んことを約し、即はち自からジョン（少年の名）を其處に伴なひ行き、諸般の手續を經て入學せしめぬ。

然るに少年は更に課業に注意せず、滿身つねに望鄕の思に犯され、恍惚として不斷わするゝことなく、美しき少女カルベートの面影は、髣髴として左右をはなれず、日每〳〵文のたよりによりて僅に其意を相通ずるを無二唯一の樂となし、全の時間を殆んど是がために盡せり、

情のいよ〳〵切なるや、これを以て滿足せず、僅に數月たつやたゝず、事にかこつけて家にかへり、ひたすらに其結婚を取り急がんことを母にせまれり。

かゝりければ母の心いつしかに崩折れ、又其親戚朋友の人々も頻に詞を添しかば、少年血氣のいたり、斯までも思ひ詰めたることをいよ〳〵かたく押つけて、飽までもそを許さゞるは、却つてよき事にあらざるべしと、茲に初めてワシントンも其事を許し、少年の喜悅はたとふるに物なく、日ならずして其式はあげられ、新夫婦相伴なふてホ子ムーンの旅に上れり。

時去り時來り、英米衝突のことは、次第々々に高まり行き、人氣は日につれていよ〳〵ます〳〵騷ぎたてり、取わけて其英國に尤も近きボストン府の如きは、劈頭第一其全力をふるふて起り、いよ〳〵其反旗を飜へしければ、先にもいへるジョルジ三世の逆鱗益々深くなりて、謀友人退治の事を群下に令し、雜沓なるボストンの市街日ならずして、草露ふかき青野が原となすべきぞとは誓ひたまへり。

茲に於て新なる官吏は撰拔の軍隊に護衞され、王命勵行、謀反人退治てふ大目的を以て渡來せり。

されば今まではさる團結とてなかりしも、事狀の急に制せられて、全洲の人民いつれも一致してむかふにあらざれば、事なりがたしと以心傳心に各自覺し、フラ

ンクリンの斡旋によりて全洲の大會議こそ其年フヒラデルフヒヤの町に開かれ、各地の委員こゝに集まりて同盟一致の事を議し、こゝに同盟の軍隊いよ〳〵成立、ワシントンは衆に推されて其總督となりしかば、家にもかへらず、其塲より直ちに結束して其職に身をゆだね、全軍をひきいてマサッセッチユ州なるケンブリッヂ街にまで進み玆に陣營を張りて英兵の襲ひ來るを待ちて花々しき働をなさんずものと、心構の雄々しさには何物かそれ面をむくべき。《鷹の眼の枯野にすはる嵐かな……　丈草》

時はこれ十一月、いはゆる小春の名殘、天朗かにして景物いとゞ長閑けき日なり、まだ朝はやきに、車聲轔〳〵駿足白泡をかんで陣門に來るものあり、風にそよぐ尾花にも心を許さぬ卒番ども、瞳を凝して其近づくをよく〳〵見れば、其車の主こそは、同盟軍隊の總督ヂヨルヂワシントンが夫人なりけり、唯さへも美くしき容顔いよ〳〵美くしく盛粧して、家に久しき黒人の御者に導ひかれて車室を下り、其刺を通じて營内に入りしこそ、げにや萬綠叢中の紅一點、誠に時ならぬ花を咲せり、《此事を題としてロングフエローの作りし詩あり》

やがてワシントンは出むかふて其室に導き、此度はからずも、英國との戰端ひらけ、今や全洲の壯丁老幼期せずして會するもの數ふるにつきず、誠に草木山川も兵ならざるはなきまでに至りたるの此時、衆人のために推されて總督の高きに上れり、されば進退成敗全軍の名譽非難はともに〳〵我一身にあつまる、いかんぞそれ務めはげまざるべけんや、さるにても御身は故鄕にありて家政一も滯こふることなき樣、注意にも亦注意を加へ、余に内顧の憂あらしむべからず、兵卒の一人だも若し陣中に不平の聲を漏すあれば、すなはち全洲の望に負きし罪余が身において逃るべからず、家庭

において奴婢もし一人だも、或は愚痴をこぼすが如きあればすなはち余が囑に戻りたる罪、御身に於て負はざるべからず、夢な忘るゝことなかれ、唯々此事をいひおかんがため態々御身を呼びしなりと、懇々其意を諭して夫人をかへしぬ。

年内僅の餘日は陣營の内に暮れて、明れば西暦一千七百七十六年なり、東風は人世の如何に關せず、もの騒しき今年も亦、其春めける有様はうたゝ去年の如くにして、滿天の殺氣も暫らくは慶雲に其處を讓り、瑞氣今さらに靉靆として、春は十三線の國旗の上にかよひ（十三州にかたどれるものにして、合衆國の旗なり、諸子必すや見しことあるべし）人は相集まりて其新年を三獻の酒に祝せり（いせが賣家にも來けり今朝の春……芭蕉）

其後玄はらくして夫人は又た馬車をはせて營所にきたり、ワシントンと共に結婚紀念の宴を張り、美をつくし善をつくして、兵士一同を犒らひしかば、いづれも皆これをよろこび、陣中いよ〳〵賑はしく士氣ます〳〵振ひたり。

さてワシントンは一同の兵をひきいて陣營をニューヨルク街に移したり、是よりいよ〳〵七年に渡る激戰或時に病に苦しみ又或時は饑になやむ、無數の群下を皷舞奬勵して獅子の如き英軍と戰ひ、唯の一度も故郷に省せざりしワシントンの勞固より大なりといへども、孜々として家を治るの傍ら、或は陣中に來り或は營外にありて百方其夫を助けたる夫人の功も亦大なり。就中天然痘猖獗の勢を以て營中に浸入せし時、自ら看護の事に當りしをはじめ、其婦人會を組織して家に殘る老弱無告の人を助けしなど、其士氣を振はしめしや、決して〳〵少々ならず。

事あまり長きに渡れば更に猶一回、次號において此等の言をつくして、然して此傳を結尾すべし、讀者乞ふ

其倦厭の情をゆるせよ。

米國女文學者の旗頭

《スタウ老夫人》　敬亭生

世亂れて英雄あらはるゝとかや。然れば米國南北戰爭の頃には、有名なる人物數多輩出しけるが、こゝに一枝の筆を握つてグランド將軍シヤアマン將軍にも劣るまじき働をなせし婦人ありけり。其婦人今猶永らへて當月十四日八十五と云ふ目出度年を迎へぬ。斯く云へば、成程、「アンクル、トムス、ケビン」の著者スタウ夫人の事かと讀者は頷き玉ふならん。

抑も夫人は千八百十二年の夏、ビーチヤア家に生れぬ。ビーチヤア家は米國に多るまじき人才輩出の家にて、夫人の父ライマン、ビーチヤア氏は名高き神學者、夫人の弟ヘンリー、ワアド、ビーチヤア氏は宗教家としても雄辯なる愛國者としても思想清新なる文學者としても廣き意味にての政治家としても米國史に不朽なる人物にて、總勢十三人の兄弟姉妹何れ愚かなるはなかりしが、天は才を與へて金を與へざりければ、一家の困窮中々なりけり。分けて幼くして母を失ひしは、スタウ夫人が大不幸なりけり。偖スタウ夫人は幼名をハア



リツト、エリサベスと云ひ、家庭並に學校の敎育おろそかならず、殊に文章書くことは天禀と見へ、十二の年「靈魂不朽の事は天然の光によりて證し得べきものか」と云ふいと大人らしき文章を書きて人を驚かせしこともありしとなん。中學を出でし後は、姉の開けるハルトフオルドの學校に入りて頓て敎師となり、父君レーン神學校々長となりし後、同じ姉君諸共にオハイオ州に學校を開きて敎育に從事しぬ。此處は奴隷使役のいと盛なるケンタツキー州の隣なれば、奴隷の事情よく見聞に觸れて、後の著作の材料となりしもの多かりつらむ。二十四歳の年父の管理せる神學校の敎授スタウ氏に嫁ぎて、スタウ夫人となりぬ。

夫は夙に夫人の天才を見破り、文學に從事せむことを促したり。其手紙に、

親愛なる吾妹子よ、御身は必文學者になり玉ふ可く侯。是は天命の定まる所に侯。左れば其積りにてよく〳〵健康を貯へ、精神を振ひ起さる可く候。

と云ふ句あり。然りながら病氣もあり、子供も多く生れぬれば、此希望によくも應ぜず。「メー、フラワア」と云ふ小説、「地上の苦は天の敎訓」と云ふ小冊子、外二三の著述はありたれども、はか〳〵しきものにもあらざりけり。

左る程に奴隷問題いよ〳〵火の手強くなり、北部南部の衝突、有志の激昂、議會の討論、米國全州宛ながら鼎の如く沸き立ちける。時にスタウ夫人の兄弟エドウアド、ビーチヤアの細君、ボストンより夫人に書を寄せて奴隷の慘狀を述べ、最後に一句書き添へて曰く

愛するハツチーの君よ、吾身若し御身程の筆力あらば、全國の民に奴隷主義の惡む可きを感ぜしむる樣なるものを書き侍らんに

スタウ夫人は吾ブランスウィックの家の小さき客間にて、壁高に此書狀を讀みけるが、讀んで右の句に到り、

立ち上つて手紙を捏まろめ、「書かむ、必ず書かむ、命あらば必ず書かむ」と誓ひける。

千八百五十一年二月、會堂の晩餐式に列なりけるが、「叔父トム」死去の一段夢ともなく現ともなく心に浮び出でぬ。英國の大豪傑クロムウエルの言に「人は向ふ見ずに進む時ほどエラきはなし」と云ふ言あり。スタウ夫人は「アンクル、トム」の趣向心に浮びしまゝ、千八百五十一年の六月五日より「ナショナル、エラ」と云ふ新聞に小說の筆を執り初めしが、最初三ヶ月の豫約なりしに、書けば書く程氣は立ち心は燃へ筆は進み、さら〳〵と書けば死せる紙の上に文字活きて聲あるばかり、書きて書きて書きまくり、十ヶ月を經てまさに完結に到りぬ。是ぞ「アンクル、トム」てふ黒人を主人公として奴隷主義の慘狀を滿天下の志士仁人に訴へ、非奴隷主義の公明正大を皇天の前に證せしもの、米國はおろか大凡世界の文學に於て千載不朽の其一產物として數へらるゝ「オンクル、トムス、ケビン」の小說なりける。

此小說終に近づきける時、ボストンの一書肆、利益半分にて之を一冊の書にせんと申込みしに、スタウ夫人は此ぞ不朽の作なりとは氣も付かばこそ、家貧窮なればとて之を辭し、終に賣れ高の一割と云ふ約束にて出版させしに、第一日に三千部賣盡し、次週に再版し、一年に百二十版に上り、三ヶ月の末に生來見しことなき一萬弗の大金を得、六ヶ月後に更に一萬弗を得ぬ。凡そ近世の著述にて、此一小說程夥しく行はれしものは稀ならむ。米國にての賣高は云ふもくだなり。英國及殖民地にての發賣高百五十萬部に超へ、英國博物館に藏めしもののみにても三十五種の版あり。其他二十ヶ國の語に譯せられ、演劇に仕組まれしなど、一篇の小說脚なくして世界を廻り、行く所として讀者觀客の同情を惹き心を動かさゞるはなく、斯くて世間に顏も出さゞる敎師の妻が世帶の暇に當歲の兒を抱きつゝ書

きし小説はグランド十萬の兵か南軍の堅塞を陥れしよりも恐らくまさりたる働を人情公義の爲めになしたりける。

スタウ夫人の名は、世界に聞へ、前途はいとも滑らかになりぬ。是より女史は二たびまで英國に渡りて、盛なる待遇を受け、名ある人達と交り、國に在りては小説としての價値は「アンクル、トムス、ケビン」にもまさりしと云ふ「ドレッド」「牧師の求婚」數卷の小説を書き、英國にてはハリエット、マルチノオ女史、ヂオルヂ、イリオット女史、ヂッケンス、サッカレー、米國にてはラウエル、ホルムス、ロングフエルロウの諸名士と交游消息して、樂しき年は過ぎぬ。然れど尤も樂しかりし時は、夫人か多年の志望空しからず、平等自由の主義全勝を占め、米國に奴隷の跡を絶ちし其時にこそありつらめ。

良人沒後、夫人はハルトフオルドに閑居して、靜かに晩年を送りぬ。春の夕日の西に傾くごと、穩に黄昏を待ちて、客あれば笑みて迎へ、音樂を聽き、天氣よき日は寵愛の犬を連れて散歩し、花を愛で、世に心なきものゝ如くなれど、好事の者は爭ふて夫人の手跡を求め、今も夫人の影だに見ふれば指し語りてあれこそ名高きスタウ夫人よと囁めくとなむ。夫人今や八十五歲、眼には奴隷なき自由の鄕を見、身は薔薇の花香しき家に住みて、心にかゝる隈もなく、豐かに老を養ふ。されど此安き生涯は、長き克己勉強苦心の年月を經て來りし名殘なり。去三月の末、夫人の人の請に應じて書して與へられし一句あり。曰ふ、上帝を信じて、善を行へと。此は夫人の特に愛せらるゝ一句にて、眞に夫人は其實例を示せし人と申す可けれ。

スタウ夫人の「アンクル、トムス、ケビン」を書きし時は四十歲なり。ナイチンゲール女史のクリミヤに赴きし時は三十一歲なり。前者は一致師の妻にして、後者は

一看護婦なり。然れど其爲す所如何に大にして、及ぼす所の如何に廣きぞや。世の爲めにする機會は何時來るも知れず、或は妙齡にして來り、熟年にして來り、老齡に到つて來る。若しとて油斷す可からず、年たけたりとて失望す可からず。されど其時に及びて世に盡すに、業なくして爭でよからんや。例へばスタゥ夫人に筆なく、ナイチンゲール女史に看護の習練なくば、何によりて働かん。是を思へば、男子は云はず、婦人は誰しも何か一の業に熟し居ることこそ肝要なれ。此は生活の爲のみならず、其業によりて生活よりも高尙なる働をなすの機會に應ぜん爲也。

學問の傾向

現今府下書籍館は上野東京圖書、神田大日本教育會書籍館なるが日清開戰前は法學生最も多く之に亞ぐは醫學生なりしに昨年戰爭終局以來は一般に閱覽者減少し中にも法學生は非常の減少にて書籍館の統計に依れば本年五月中の閱覽者は二千三百餘人にして內法律、經濟、政治に關する閱覽者は僅かに千人內外に過ぎず却て機械工藝等に關する閱覽者殆んど其半數を占むるに至れりと亦以て戰後人心の趨勢と學問の傾向を見るべし

文藝

ゑにしの糸

其村子

はからずも病に犯され六代君のつゞき綴る能はず次號までの猶豫あらんことを請ふ

蒲團着て寐たる姿と詠じける、洛外東山の一勝、眞葛が原ときこえしは、其名も高き高臺寺の東南にあたれる閑雅幽邃の一帶なり、萬幹の松竹色とこしなへに濃にして、潺湲の流常に四絃をかなづるのあたり、いとささやかなる茅屋あり、柴門年ふりて柱かたむき、茅茨雨に朽ちて軒尤低し、されども明媚なる六々の山頭は自から庭の面を飾り、春風駘蕩花盛なるの朝、金氣

蕭々銀月明かなるの夕ともに、風景充滿して一もかくるところなく、宛然に巧なる一幅の唐畫、見ぬ古への五柳が菴もかくやありけんと思ひやらるゝ住家なり、主人なん久留間浪太郎とて此年二十三四の若者、衣縫ふ播磨の國の人なりけり、こゆるぎの五十路にあまる一人の老女を雇ひて薪水の勤をまかせ、自からはひたすらに讀書作文に四六の時を費やし、菅の根のながき春日も書齋を出でず、風そよく秋の夕もたえず文机にむかひ、東西古今の文人詩客を見ぬ世の友として更に餘念もあらざりけり、唯時として懶きを覺ゆるときは、川島の某とて聖護院のあたりにすめる友を訪ねて或は黒白の石をたゝかはせ、又は品文隲詩の外、更に浮たる戯に指を染ず、花柳の巷に足を印せず、現に今の世には難有男なりけり、今日も亦朝早くより彼のともがり赴むき暮に及びて歸り來る道すがら、隈なき月の光のいと面白きに全たく勞を忘れはて、知らず識らずの間にはや下河原近くまで來れり、誰が住家にやありけん、杉の生垣を漏れてちら／＼と光の見ゆるところ、琴の調のいと床しきに自からひかれ／＼て身はいつしかに枝折戸の前にたてり、まだ鎖を懸けずやありけん、ふるゝまゝに戸はたと開らけ、たよ／＼として二歩三歩庭の面に踏こめり、響聞えければ琴の音はひたと止まり、又戸じまりを忘れたるにや、今しも物のはいりし音あり、疾く／＼見て來よとつぶやくは艶しき女の聲なりけり、戸じまりは心してかたくせしにと答へつゝやをら立上り、はした女と見えて障子ひき明け出來たる人に見とがめられては叶はじと思へどもあわたゞしく逃ぐるも亦流石はしたなしと、思ふ内早近づき來て何者ぞといふ、是は眞葛が原のほとりに住居せる書生なり、今日しも岡崎村なる友がり赴むき、語りほゝけて日の暮るゝをも知らず、やう／＼と今返り行くところなり、こゝらまで來りしに主の君の

奏でたまふ爪音のいとも床しく、止るともなしに立止まり、聞とれてかゝる次第、無禮の罪は其許よりよきに斷はり玉ひねと、言捨て頓て立去らんとするを月影にすかし見て、聞えたまふ御許は久留間樣にてはおはさずやと問ふ、事のいふかしさに思をなやまし、何故に吾名をかゝる人の知れるやと、ひた疑に疑つゝ、宣ふが如く久留間浪太郎にて候なりとうち答ふ、女はいよ〳〵馴々志く、左なるべし〳〵、思ひ違はざる事のうれしさよ、されば疾々此方へいらせたまへ、主の君のいかに喜びたまはんと、いひつゝ後にまわりてかたく戶ざし、斯くなせば出で玉ふべうもあらず、とく〳〵來ませよといふ、されども固より知らぬ人、さることのゆめ〳〵あるべきにあらず、いかにも今宵は許し玉へよまかりなんと、否む辭をひたと打消し、知らぬ人、のたまふとも此方はとくより御身を知れり、主の君は清水に信仰深く、日每々々の朝まうで、御住居の前は行來に必らず通らぬことなく、遂にはいとくわしく御名までも覺へしなりと、聞終りて辭を和らけ、左樣にてありしかや、去らば何日にてもあれ、又立よりたまひてよ、澁茶にてもよし指上なん、御用のふしは又其時に仰あれ、夜もいたくふけなんに留守もりのさぞや心もとなかりなん、願ふは此處あけたまひねといふ、かゝる事に果しなきと如何に思ひけん、主なる人の端近う立いでゝ、米やいかにせしと問ふ、いかにせしとは扨も思なの言の葉やな、日頃こがれ玉ふ久留間の主計らずも來りたまひたれ、夕つ方松か枝よりささがにの降りたりしはかゝらん事の志らせなるべし、疾茲に來て彼方へ志るべしたまへよといふ、されど彼の人は何の言葉もなし、去れど立ちたるまゝにしてかくるゝの氣色もなく、女は猶々心をいらちたゞとく〳〵と進むるのみ、困じはてゝ怒るも流石と心を定め、されば御免あれ主の君に見えなんと彼女につれら

れたり、八疊の座敷床には勾當の内侍圓山主水が筆美くしく、九谷の花瓶今を盛りの草花をはさみ、違棚嚢棚いづれも華美を盡せる有様、額には文晁の富士淡墨まことに高尚なり、文机には螺鈿の軸せる種々の卷物を重ね、料紙文庫は古代の蒔繪、書架には多くの書をのせたり、いまゝでも彈ぜし琴は猶其儘に其處にあり、態とならぬ香いと馥しく、萬其事なく誠に床しき有様なり、座したるがまゝいとも手持不沙汰にして何といふべき言の葉もなく、唯手をこまぬいて居たりけり、はした女はやがて茶をすゝめ菓子を供し、仕かけたる事にかこつけ座を立て外に出でしあとは、二人相向ひたるがまゝにて暫らくは何の言葉もなし、今宵計らずも要せられて來りし事、何が故とも更に解せず、されども年若き我等かくひそやかに對ひ座せんこと、よしや他人の見ざるにもせよ、吾心にせめられていともつらし、冠香の誠は賢しき御身いはずとも知り玉はん、茶菓の御もてなしにて事たりぬ、されはこのまゝにてまかでなん、折もあれば又伺つてゆる〳〵と一曲うけたまはらん時もあるべし、いざや〳〵とたちあがるをいと慌たゞしく引留め、いぶかしみ玉ふは實にさることなり、更にかへすべき言葉もなし、願はくは御憤りを靜め是御覽下されよと、差出しつる一葉の短冊、さてはなまめける言葉ならんとさげすみながら、取上げて打見れば、こは抑もいかに、思ひを夜半の月にかけ、或は高根の花にくらべし、艶詞にもあらず、手蹟まがふべうもなき十七字の俳句は櫻を咏ぜし我身自からの即興、いと面伏なる言葉なり、何故にめぐり來てかゝる處にありしぞと更に心落居ず、如何なれば此一葉御身か許に尋ねける下より答ふる様、事ながくともきゝ玉へよ、そも妾こそは峯子とまうし、父は或やんごとなきあたりに仕へ覺いとも目出度かりしに、十六夜の空にたとへつる人の世のうきふし繁く、はか

なくもまた四十路にも足らで世を去り、其後永の年月を唯手一つにて育て玉ひし母の君も亦數ふれば三年以前に身まかりたまひ、殘るは同胞もなき妾たゞ一人なり、叔父なる人の世話になりける恩は實に數ふるにあまれども、そは全たくの親切ならで、妾につきける財に心をかけつることは日毎々々にいよ〳〵著く、久麿とてそが第二の子、世にも賴なき懶者にまみえよとせまる、たとひ世を獨住にて果し、家系此まゝにして盡果つるともいかにぞやかゝる人に添ふべきと、つれなくもうけひかぬことをいと惡しと思ひ、はては萬吾身をさまたげて猶飽たらず、終には茲に押込めて自ら今は妾がもとの住居を奪ひぬ、さるにても女の悲しさはこを如何ともするに由なく、唯しひたげらるがまゝにかへすこともなく、憂き月日をまめなるはした女の慰に忘れ、かきならす琴に時の間の樂を催し、僅に其日を送る身なり、去ぬる春の彌生の頃なり、はした女のすすむるがまゝに地主の櫻見にまかりし時、數多群衆の中に、かいま見まいらせしは方樣なり、何とやらん心に思ふ君に似通たまふことのいとも床しく、目も放たで打守りたりける折しも御身さる樹の枝につるし玉ひし一葉の短冊、いかなる言の葉やありけんと床しさに罷り出でゝ申うけんかと思ひしも、耻らひてさしひかへしなり、やかで御身の立去玉ひしを見てはした女を彼處につかはし、得させ來りてよく〳〵見ればいよいよ床しき水くきのあと、ながめける内にやるせなや君のかげをうしなひまいらせ、今更になんと詮方なければ、其日より清水の觀音に歩みを運び、本願誤ちたまはすば、大悲の御力もて何卒此短冊の主にあはせたまへよと祈りし事の甲斐むなしからで、今宵はからずも此處に來りたまひしことの嬉しさよと、述べをはりて更に耻らふ色あり、さなりしか、さなりしか、御用とはさることとなりしか、御心察し參らせぬにはあら

ざれども、今しも申せしがごとく、少壯の男女世の人の口の善惡なければ、我はこれよりまかるべしと、あとは又何のいらへもなく、更にとむるをつれなくふりきり、逃ぐるがごとくに立去りけり、あとにひれふしてよゝと泣く聲のいと高きに、はした女はいとゞ驚きて次の間よりかけいでゝ、いかにしませしやと、肩押撫でて問ひければ、やう〱にして語りいづるも伏したる儘なり、なめなりとて殊の外に憤り玉ひし事の悲しさよ、此後いかにせばよからんと、聞くはした女もさればなり〱と私語のみ、折しも手飼の狆の鈴ふりならしつゝかけ來たりてうづくまるをよく見れば何にやありけん色美くしき物を口にせり、奪ひとりて打見れば、是なん蜀江の錦、龜甲つなぎに花菱を織出したる守嚢なりけり、はした女はかゝる尊き物と知らず、唯々いぶかしげにながめ居けるをなきしづみながらちらと見て、こは誠に得かたきものなり、必定彼君の急くまゝに取落したまひしならんと、流石其人の持ちしものとしいへばいとも〱床しさに繰返し〱見る内に口自から開け中より出し一葉は小倉の色紙にして紫式部が歌なりけり、こは終焉の其日母の口づから語りたまひし品にして本是我家傳來の寶なり、さればこれに添ふ一書あるべしと、更に守りぶくろを改ため見ればまがふ事なき亡父の手蹟、嬉しやな扨はいよ〱其人にてありしかや、斯くも不思議なること、是全くは觀音薩陀の力なれども亦なき二方の御引合に疑なしと、今更に喜こぶこと限りなし、やがて傍への文庫より一個の卷物、古代裂の服紗に包めるものを取出し、此品を持ちて眞葛か原にいそぎゆき、逢ひまいらせて手渡なば、ことの故由明らかなるべし、いざとく〱と進められ、はした女は深き夜をも厭はず、ひた急ぎにいそぎ行き、いなむを強ひて逢ひ、其品を渡しゝに、一目見てはたと手を拍ち是はもと我家にありしものな

り、母上のいまだ世にいまそかりし其折々、語りたまひし言に聞けり、我父かつて都にて勤の道におはせし時、語らひたまひし人に櫻井のなにがしといふありけり、刎頸斷金の交はり誠にふかく、さながら同胞の兄弟にもまされりと知る人ごとに許せしとぞ、或日其櫻井の主父に語りたまふ樣、かくまで深く語らひし上は、行末子等の代々までもかはらでかくこそありたけれ、それにつけて願はしきは我に一人の娘あり、いまだ襁褓のうちにあり、かつて聞きし御身が令息此年二歳との由そが行末の妻にまいらせん、されば予が娘は御身が嫁にして令息は又予が子なり、かゝれば予と御身といよ／＼かたき緣者となりなん、此儀如何に聞入れたまはずやとありしかば、父はもとより願ふところ、何條否み申すべきと談忽ちにして整ひたり、父はかための印わが行末の嫁が身の上、いよ／＼榮え行けかしと其時渡せしこそ此一品、文政草紙の書卷なり、されば櫻井の主も亦、事のあまりにうれしきに何か惜しむべきと家傳來の重寶小倉の色紙にかための一書を添へてこそ送られたり、さればいかにもして是を印に回りあひ、目出度この家をつげかしと、のたまひし母に別れまいらせしより、常住さらに身を離さず、肌につけし守嚢に秘おきし小倉の色紙、今宵のまぎれ何處にてか取落せしことのくやしさよと、聞きも終らではした女は、そは此品に候べしと差出すはまがふべうもなき、龜甲つなぎの嚢なり、されば宵の程逢まいらせしは其櫻井の息女なりしか、今こそ少し憚かる事ありて久留間涙太郎といへども、我こそはまがうべうもなき、尾崎左膳が一子寅之進なりと、いともくはしく明しければ、はしためもいとゞ嬉しく、やがて立歸りて此由を語りければ盡なんとせし緣にしの糸玆につながれ日ならずして目出度も鴛鴦の衾を重ね、家名を相續なせしとぞ

（完）

談叢

迷信の金塊（本願寺の祠堂金）

上

松原乾坤

數年前のことなりき、或る年の春、予が北陸道を旅行して歸りがけ、道中金澤の邊より胡摩の蠅といへるものに跡られて旅銀を失ひ、これより百何十里、乞食して歸ること覺束なければ、一まづ京都なる知人を便りて行くに若くはなしと、警察へかゝりて着たる羽織を賣拂ひ、辛ふじて壹圓あまりの金を得たれば、是れにて木賃へなりと泊りて京まで行かんと決心し、其の日より草鞋穿となりて、てく／＼と歩き出しぬ。

一日に十里詰としてもまだ是れから大聖寺まで一日、越前の福井まで二日、敦賀まで四日半、江州路へかゝりてまだ三日あり、京へつくには彼れ是れ七八日もかかるべく、壹圓の旅費では一日に十四錢より上は遣えぬ勘定なれば、餘程節儉して行かねばならぬうへにも晝食は所詮食ふこと出來ず、肝腎な草鞋も一日に二足は穿き棄てられず、腹が減りたりとて迂濶に茶屋へ腰かけて菓子など撮めば大變なり、まあ行ける所まで行つて見るべしと堅く犢鼻褌の緒を締めて立ち出でたり。

一日十里詰とは易いやうでも旅馴れぬ身には中々難澁なり、翌る日は難なく大聖寺へ着きしも其晩脚疼みて便所へ立つさへ容易ならず、我慢して其翌日又十二里歩みて福井まで漕つけしが案の定三日目には足の裏へ水膨を踏み出して其の日は一日木賃宿へ轉がりて居たり。

旅して心地のよきは奇麗にして瀟洒としたる旅舍へ就いたる時にある事申すまでもなけれど凡そ又旅行の愛も

の、辛いものを身に染みて覺ゆるは木賃宿のごたく／＼なり。何十年以前に建てたかと思はるゝ古造作の檐は低く、柱は歪み、油垢に黒染たる障子唐紙の煤さい常は掃ひし事なき。塵芥の四隅に堆高ふなりて、緣の壞れて臟腑の出さうな疊の上を反古紙にて貼せる穢らしき薄緣にて覆ひ被せたる、座敷の隅々半風子の潛れさうなる布團を積み重ね、其上に蚤など潰せる木枕をならべ、一種得ならぬ臭氣は其れより醞釀して一室内に瀰漫、僅か八疊ばかりの座敷に六部、巡禮、報捨參、辻藝人、あるは飴屋たんきりの親爺、兒持の蝙蝠傘直しなど都合七八人の同勢を一室内に泊まらせて、夜は疹、疥癬などかきたる手足を遠慮なく搔やぶりて其汚ならしさ堪へ難し。

詮方なき儘に、予は一日虱布團にくるまりて足の疲れを休め居るうち黃昏頃になりてどや／＼と入り來る六七人の道者あり、見れば何れも年老たる女伴にて、何か近所の神社佛閣へでも參詣といふべきいで立ちなり。ヤア今日はいこ疲勞たんべ。新屋のお婆どの、こんた杖え何處置かはつたぞ。わしらア草鞋のをわんじよしかんばいの。ご亭主こりやはい何方賴みますべよ、こもり傘皆な持ちやはんかいの、わしらア此處豆さ踏出ただアなど、田舍道者の濁み聲喧ましく、杖、蝙蝠傘、と共に新らしき木綿の草鞋を二足づゝ赤毛布に包み手頃な柳行李を淺黃木綿の風呂敷に包める荷物と一緖に結つけ雨桐衣を四つに折ッて其上に着せかけ、午房縞の粗き木綿着物に唐金巾の裏をつけたる袷の裾を高くからげ膩やら垢やらで漆の如く黑ずみたる頭巾を襟元に捲つけて何れも袂を狸の腹のやうの膨らし其中に炒豆やら、燒米やら、麥粉やら、紙袋の裂けるほど詰たるものを容れてまるで判じ物ともいふべき身のこしらへなり。

亭主案内して部屋へ入り來り、臨苦しくとも御相客を

頼みますとも何とも言はず、おまへさん方この座敷がよからうと言ひつゝ同勢六人の客を一室内に逐ひ込みたり。サア大變だ、今夜はこの御客と合宿か、隨分恐れ入ッたものだと今朝から獨りで占領して居た八疊の座しきをズット讓ッて予は片隅へ逃こみ小くなッて一座の合客の容子をそれとはなく仔細に吟味し始めたるこそおかしけれ。

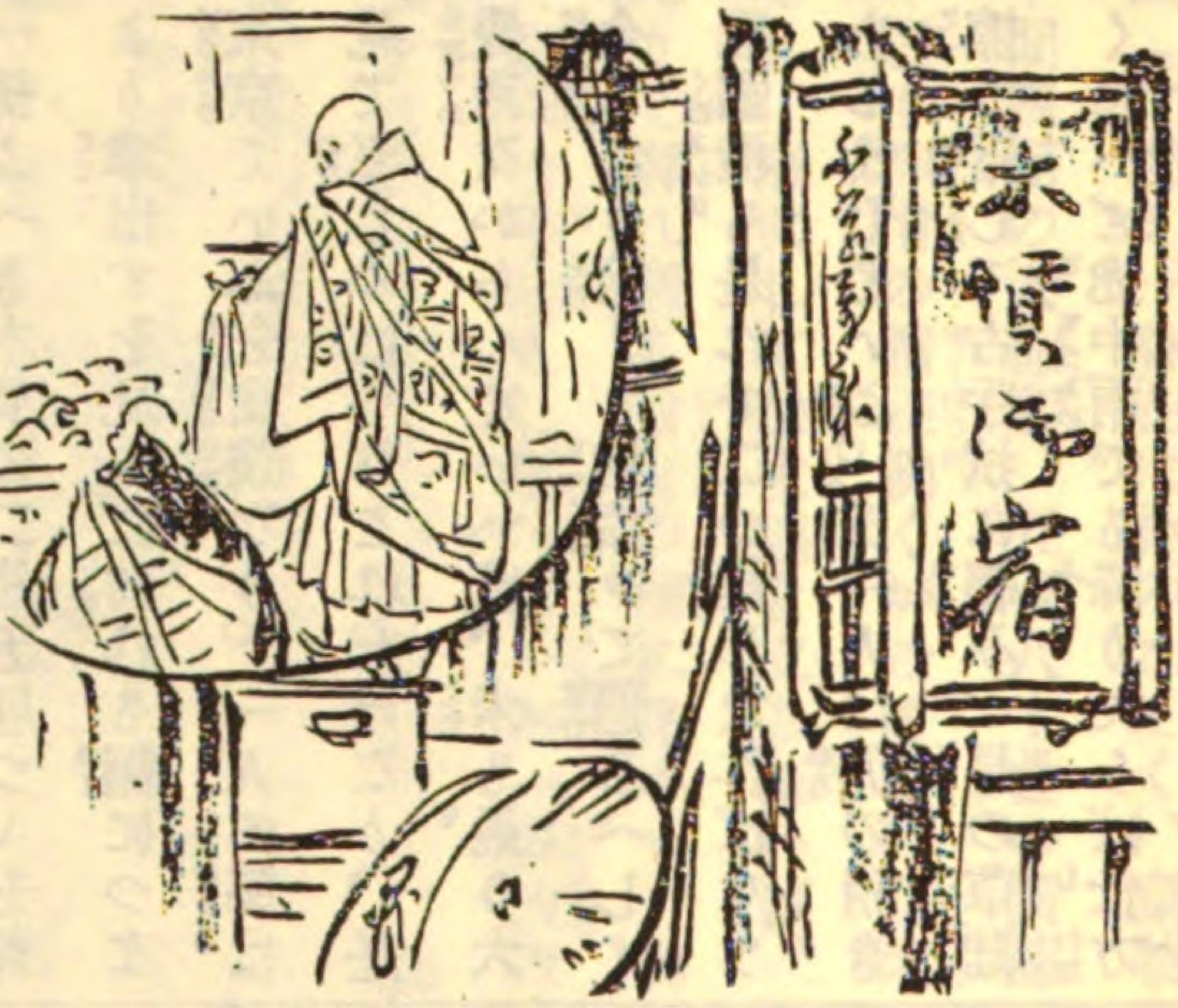
まづ同勢六人の内一番年の寄りたるは七十近き老嫗にして最早眼も耳も利けなくなりしかと思はるゝばかりの年輩、背は弓といふ譬もあれど是れは寧ろ規矩の如くに曲りて如何にして道中一里の路も行くかと不審がらるゝほどの容體なり、次は何れも六十前後其内尤も壯くして逞まし相に見えしもの二人ありしが其れすら既に五十路は越つらん、うち見しところ何れも百姓家の老嫗にして、さして零落たるものとも思はれねど道中するに木賃泊して行くを見れば、信心の志ざしはありながら錢なくして世に謂ふ乞丐詣をするものならんかと。

間もなく亭主出で來り、御飯はどうして焚きませうかと言ふ時、銘々合切袋より一合づゝ取り出し是れにて粥をといふ其の米を見るに、孰れも水晶のやうなる上白なり。ハテ此の人達は眞逆乞食でもなきに銘々の飯米を嚢の中から取り出したるこそ不思議なれ、併し乞丐ならば、大抵は引割麥か、小糠米を貰ふに極つだものなれば何れにしても色の黑いのを取り混て持て居さうなものなるに揃いも揃つて今のごとき上白米を所持すること合點ゆかず、但し是れも物參の何か所以はあるべしと敢て深くは疑念も措かざりし。

頃て粥は煮たり、木賃宿の造作もなく大羽釜に杓子を付けて亭主自から座敷へ持ち出し、皆様食るものは御持なるかといふ時、持ました／＼と一座六人聲々に呼はり柳行李の中より各々箸と茶碗を拿出し大丼に山

のごとく盛りて出したる宿の亭主が愛相の澤庵漬を菜となして手輕く晩餐を濟しぬ。

最早夕食も畢いたればと予は徐〴〵にぢり出して問ひ始めぬ、聞いて予は痛くも驚きたり、如何なればこの人達が百三十里のところ、よくも道中し遂げんとは。



是等の老媼は、越後高田在のものなり、予はこの近邊の何處佛堂へ參ものと思ひしに茲年三年目とかにて遙〴〵京の御門跡へ參詣するものゝよし、先年參りし時は法主の御不例にて御高剃を頂くことの出來ざり故殘念なりしが、此度は是非共御髮剃を頂く筈とて何れも喜び合ひ、中にも今年六十八の老媼はこの度が參詣の見納めなれば序に極樂の手曳をもして頂かんなど涙こぼして言ふこそ殊勝なれ。

道中百三十里のところを、往復一月半もかゝりて旅するよしにて村を出てから八日路位までは、銘々我家より持ち出したる米を、行がけの糧として食ひ、また手造りの草鞋を二足位用意して道中の穿き料となし、猶其外、煎米、炒豆など、つれ〴〵の携帶口糧として茶屋へかゝりて費ふ晝食の冗費を省き、何から何まで儉しくして行く、是れ御堂まひりの主意なりと、予は唯其こゝろざしの殊勝なるに感心して宿帳を見れば、越後國中頸城郡新井村農、山田サク、森下トメ、同メノ、川崎イマ、同郡中曾根村農、小林トラ、同シゲと記されけり。

中

翌朝未明に起きてこの同行は宿を立つ仕度を始めぬ。携帶せし米を出し合せて粥を炊かすことと又前夜のごとし、予は獨り寢床の裡にありて仔細に彼等の樣子を窺ひ居たりしが、宿へ拂ふべき木賃の二錢五厘づゝを銘〱が懷中の財布より拿出すを見るに何れも緡につなぎたる十文錢にて東京でいふ乞食錢なり。一人の婆は解きたる錢を吊て見て私しのはもうこれだけなり、是れだけで京までは覺束なからんといへば、米も最う大抵無くなりたれば今日より徐〱杓振ッて廻るべしといふものあり。成程國境も是れで二つ越したればもう杓ふつても差支はあるまじといふ。又一人は泥の附きたる草鞋を鄭寧に擦り落して古手拭に纒み、是の草鞋歸りまで持たせたく思へど途中雨でも降りたらば仕方なしとて當惑らしき顔つき、又一人は雜巾のごとく綴りたる足袋を二足取り出して何方を穿こうかとの詮義夜中かゝりて股引の繕いを爲せしも絲屑一つ遺さずして立ち去りたり。跡にて予は謂らく、何程冥利の佛まいりとてあのやうに吝きも亦とあるまじ、揃いも揃いて同行人六人が、嗚呼若しおれに胡麻の蠅に取られた金の半分もあらば、彼奴らに一圓札の一枚づゝも惠んでやッて天にも登るやうな氣にしてやるものを、今日から杓振て參ると聞くさい中々憫然の至り、併しあれでも京へ參りたらば、御剃刀戴くことの出來るものにや。

下

其後予は道中難なく京へ着きて、知人を尋ね、此處にて凡そ十日ばかり保養するうち、或日本願寺の門前を通り掛る時、此日遠國の信者ども打集いて御剃刀を戴くとて門前に人の市をなせるに偶と以前の事を思ひ出し、時にあの木賃宿にて凉慄たる光景を見せたる婆どもは如何にせしかと、立寄りて見れば、御堂の前は老若男女人黒山のごとく、雜沓を極めて、人他の差別な

く、肩絹をつけたる男あり乞食のやうな女あり、群集を押し分け〳〵てやうやく堂に上れば役僧數多出張を爲して其れ〳〵信者に接持する、御佛前には今燈明上りて金蓮開き、燭光燃え。香花は林のごとく、菓物は山をなし、三十間四面の大伽藍、五百八十疊の廣座敷に人豆のごとく埋り伴僧の讀經沸くがごとく、信者の念佛煮るがごとし、既にして法主座を立ち玉へば、金襴の袈裟綾に光りて群れ居る信者の框に晃めく、勿體らしき面色にて念珠の手をさし玉へば一列一群波のごとくうねりて聲をも出さず頭らを下ぐる樣なり、扨は今ぞ御剃刀なり、彼の乞食婆どもは如何にせし、この有難き目に遭はぬは定めて初穗のなき歟ならん、見つけ出して錢を與へ、思ふ存分法主の面影なりと拜ませて、遙〳〵參詣の志ざしを屆かせて遣らんと堂の下を見渡せど其れと思はるゝもの更らに見當らず、誠に冥加の薄き奴なりと思ふうち、斯はそも什麼に遙かなる向ふの框のうちに、而も特別席とも思はるゝ座の中央に大勢の信者と共に彼の婆の一群が、夢中になりて涙こぼして居けるを見受けぬ、これはと、餘りの不思議さに、近づき寄りてよく見ればこの眼に僞りなく人數も異らず六人の乞食婆が、今しも有難き法主の御髮剃を戴きて隨喜の涙に咽かへる樣、一視同仁ほとけに貧福の差別なきぞと感心して見られしも道理かな、本堂より法務所の方へ移る長廊下の鴨居にずらりと貼り出せし寄附金の表を見れば、麗〳〵しく左の通り記されたり

本堂再建造營費金の内

一金五十圓　中頸城郡新井村　山田孫太郎祖母殿

一金三十五圓　仝　森下トメ殿

一金三十五圓　仝　森下ソノ殿

中頸城郡中曾根村
一金三十圓　小林甚平母殿
一金三十圓　仝　小林シゲ殿
一金二十五圓　仝　新井村　川崎イマ殿

命賭け（下）

楓葉

其夜オスマン新宰相は新に下し賜りし官邸に歸りて、つく〲と翌朝の事打案じける程に、父親はる〲故郷より尋ね來り、四方山の話の末、アドリアクープル地方に役人の謀叛をたくむ由を話しければ、是れ倔強の事なり、明日帝の御前に出でなば、是事を申上げて將棊の勝負を逃れむものと思ひける。

偖翌朝に到り、帝は果して新宰相を召して、一ト手ドウじやと仰せらるゝ程に、宰相進みて、御領分の某と申す所に斯々のたくみを爲しけるもの有之と申す。帝驚きて、急に打手を差向けんとのたまへば、いや〱夫れにては評判高くなりて仕損じも有之べし、小官に仰せつけられ候はゞ、罷り向つてよきに計り申す可しとありければ、帝尤もと同じ玉ひ、新宰相は倔強の從者多く率ひて直ぐにアドリアノープルに向ひ、手早く謀叛の張本を召取り、謀叛の卵を蹈潰し、瞬く間に事平ぎて、歸りける。帝大に喜びて、宰相をめで玉ふなと一ト方ならず。是れよりしばし將棊の話も出でず、宰相富貴榮華人の羨むほどなりける。

然るに高名鬼神の雲を受くとかや、こゝに宮内官某不圖新宰相を恨むる由あつて、皇帝の御前に巧みに讒言をなしければ、元來猜疑深き皇帝、大に宰相を忌み玉ひ、翌日直ちに宰相を召して、命賭けの一ト勝負仰せ出されける。

宰相はつと思ひしが、仰否み難く、心きめて將棊盤に

ぞ向ひける。

あはれ此一ト勝負に宰相の命運は定まらんずるなり。勝てば先づ好し、負ければ、其を口實に首は飛ばん。左れば此處ぞ一生一代の手際の出し處と、總身汗かき有らん限りの技倆を出して、帝に向ひけるが、此に如何に二タ手目に何思ひ違へしにや大失策を仕でかして、今三手か程には大敗北とならんずる有樣に、新宰相ははつと驚き、身の毛一時に立ちて、呼吸つまり、冷汗千萬の毛竅より湧き、此處ぞ絶躰絶命と觀念しけるが若し顏をあげては内心の恐を帝に見られることもやと思へば、將棊盤の面を見つめ居たりける。然るに帝も餘程考へ玉ふと見へて、一向に駒を動かし玉はず。不思議と思ひて見れば、此は如何に、帝は居睡してぞ坐しける。

宰相も見物の諸官も驚きながら、皇帝の御事なれば起しもあげず、唯目ざめ玉ふを待つに、一晌立ちても醒め玉はず。侍衛の武士か是も居ねふりにや手中の剣を大理石の床の上にがらりと取落す音に、皆々愕然として其方を見かへれども皇帝は醒め玉はず。あまりの事に侍臣萬死を冒して皇帝の御衣の袖をひき參らせしに、帝ははつたり床の上に倒れ玉ひぬ。永き睡に入り玉ひしなりけり。

（完）

百魚譜

（横井也有）

人は武士柱は檜の木魚は鯛と、よみ置ける世の人の口にかけるなのかさま〴〵なる物ずきはあれども此の魚をもて調味の最上とせむに咎あるべからず糸かけて臺に居たる男ふりさへ外に似るべくもなし、まかるをもろこしにはいかにしてか、ここに賞翫の沙汰も聞へず是に乘ける仙人もなし、されば夷三郎殿も他の業武者には目もかけずたゞ是にこそ釣もたれ給へ、龍を鱗の司といふは食味はなれたる理屈にしてさは是を料理せむと學びたる人はむかし愚なる名をもこそとゞめたれ龍門瀧にのぼらんとする魚ありておほけなくも大聖の御子にも此の名をかわせ給へる、されば世の名聲はかの鯛にも並ばむと

すかれはいかなる幸にかあらむ味ひ美なりといへども鯛の料理の品々なるにはにるべくもなし乾物炙物にせず膾すましろよろしからず、くすし蒲鉾に用ひがたく鹽にも酢にも調せず、只さし身あつ物にとゞまるは多能を耻といひけんを中々ほまれと思へるにや　昔　平家に悪七兵衛景清と名乗て民間には泣子をも威すべく朝比奈辨慶に肩をならべんとす、しかるに記錄の上にしてはしころ曳の外はさせる働なくて只二郎兵衛も五郎兵衛もおなじつらなる侍なりいかに世に名のこと〳〵しきぞとある人評したるものありかれたゞ七兵衛が類なるべし

松江の名産　我　朝にも品くだらず張子は是を秋風に思ひて仕途を辭し平家は是を船中に得て官路に進む進退いづれをかうらやむべき

鮒は近江に洞庭の名をくらべたる鯉に似て位階おされり、名には紅葉をかざしたれども膾は春の賞翫となれり

鰤は節饗の頃もてはやされ梅さくころ世に匂ふ鯖は初秋に祝はれて空也の蓮のはに登るは後世善處の契もたのもし

鰹は芥子酢の風味上戸は千金にかへむとも思ふらむを鎌倉の海の素性を猿好にいひさかされたるいと口おし　鰹節となりては木の端のやふにも思はれずその　梢　とも見へずして花の名をさへ世にちらしぬる

鮟鱇の唐めきて子細らしきにつるし切とはいぶせくして桀紂が料理めきたり、かれは本汁にゑらまれ鱈はかなはず二の汁の大將にて搦手をぞうけ給りぬ

もしは文字の理窟によらば紫の上には　鰆　ためでさせ給ひ中宮の御膳にはことに鮲をやめさせ給ひけむ

鮭は越路に名ありて其の肉の雪にも似ず色は入日の雲を染めてうるはしく照たるこそいみじけれ。たま〳〵鱒といふものもその色はまけじとやいとむらんを

狹夜姫は石となり山のいもは　鰻　となる、かれは有情の非情となりこれは非情の有情となれり石となりて世に益なく　鰻　となりて　調法　多し

牡丹は花の一輪にて賞せられ梅櫻は千枝萬葩を束ねて愛せらるそれが勝れりとも劣れりとも更に衆寡の論には及ばず、白魚といふもの丶世にもてはやさるゝはかの鯛鱸の大魚に比すれば今いふ梅　櫻　の類と等し、しかるに國俗のとなへ異にしてしろ魚ともしら魚ともいへり、是れいづれならんといふにされば白鷺ともしろ鷺ともいはればしら魚といふこそよからめといへばかたへの　童　のさし出ていなとよ世にしら猫ともしら　鼠　ともいふにこそとうちこまれて爰に物　定　の博士しばらく默然たり

鱸は鴨川の　篝　火に責られ　鯰　は瀏江の瓢箪におさへらる比目魚は黒白に表裏をあらはし海鼠は跡も先もなし

鹵にもたまらぬ鯨の骨は何の爲めに持たるやそれも海月のなさ

にはまされるか

こゝに蛸の入道は壺に入てさらるゝこそ愚なれ那智の瀧壺ならば文覺が行力をも傳ふべきを一休の口にはほめられながらまさなの法師の身の果かな

かなかしらといふ名のめでたくこそ産屋の祝儀にはつかはれ侍る、さるを石持といふもののかれ持ともいはゞ世にはいかばかりもてなされむを益なき名をもちて口をしとや思ふらむ

鰯細魚はをさなき心地ぞする、大男の鋸口そらしてくふべきとも覺へず

鯊はたゞ釣る頃の面白きなり里は砧に蚊屋とまひて木曾に便よき人はまたき新蕎麥喰たりなどほのめかされてうらましき比ならむ

泥鰌は酒の上に赤味噌ほどよく調して唐からしくはへたるころよけれ白味噌がちなる大宮人はいかに喰らんとさへ覺束なし

鰒とは先名のふつゝかなり、いかで無比の美味をそなへてあやしき毒をもたりけむその味ひと毒の世にすぐれたればくふ人を無分別ともいひくはぬ人を無分別ともいへり

鯑といふものゝ味ひことにすぐれたれども、崑山のもとに玉を礫にするとか多きが故にいやしまる、たとへ鯑は田畠のこやしとなるとも頭は門を守りて天下の鬼を防ぐ其功鯨鯢も及ぶべからず

されば歌人は鳥虫に四季をわかちて魚に四時の題詠はなし俳人兼て魚を品題とするは、もつはら味ひの賞玩を捨ざる故なり、去かれは歌よみは耳目の愛にとゞまりて食は野卑なりとてさらざるに似たれども喰ふべき若菜をもつはらによみて菜の花のうつくしきを歌の沙汰に及ばぬは喰はれぬ故によまざるにや無下に口惜しと人のいひたるとがなき詞ながらおかしかりけり

家政

小兒と菓實

小兒の普通に惱まさるゝは、臟腑に蟲の生ずること、即ち蛔蟲によりて病氣を生ずるもの多し、何故に蛔蟲の生ずるか、それは小兒等が惡しき食物を食ひしか、又は過度に食し、爲に消化器の運動に遲滯を生ぜし結果より生ずるなり、此蛔蟲を去らんには、消化器の運動を遲滯なきやうにするは肝要の事なれども、たゞ

それのみにては蛔蟲を撲殺し盡すこと能はず、如何にせば之を芟除し得るか。

それには菓實こそ最も適當したる藥劑なれ、今より百年前博士ベンヂヤミン、ラシユは此方法を發見したり、菓實は充分蛔蟲を除き去るといふこと最も理の見易きものとなれり、小兒を害する蛔蟲に、菓實が其身の毒となる證を示せば、今玆に一個の蛔蟲を摘みて阿片溶水の内に投ずれば十一分間は生存し得られ、石竹根水にせば三十三分間、葡萄酒中に十分間は生存し得らるれど、若し赤櫻實の汁に浸さば僅に六分間、黒櫻實の汁には五分間、赤覆盆子の汁には三分間、越橘子汁には七分間、草覆盆子汁には五分間にして死滅に至る、此の實驗より見る時は、小兒が好める新しくして熟したる菓實は、蛔蟲を撲滅するに大効あり、今より菓實の好時節となれば食後などに新鮮にして豐熟せる菓實を與ふるは大いによろしかるべし。

吸物五種

吸物には醤油のすましと味噌のすましの二種あり、醤油すましは、醤油と味淋とに味をつけるものにして、味噌すましは常の如く味噌汁を煮立て別器に入れ置きて冷せば味噌はおどみて澄む、その清汁を酌みて用ゆるなり。

◎鱸の潮煮　鱸の潮煮吸物も鯛と等しく、肉と骨とを常の如く切り、鍋の中に古酒を少量入れ文火にて酒の香の失するまで煮つむに乘じ、其鍋へ水を注ぎ鹽のみにて仕立て出す、此秘訣は汁の濁らぬを最良とすれども、好により煮汁を少々加味するもよし、鱸にて鱈もどきの吸物を製せんとならば、先づ筒切にして輕く壓力をかけ刻み、昆布を入るゝことお正月の鱈汁の如くす、これからの料理には面白し

◎泡雪はんぺん　一種の魚を撰み、先づ生にて皮と骨とを去り、擂鉢にて能く摺ることはんぺんを製する如くにし、之に雞卵の白味をのみ入れて、味淋と食鹽とを適宜に加へ水を注しゆるめ、能々摺り交ぜて後、茶筌にてたつれば泡立つ、其機を失はず金杓子にて掬ひ、鹽すましを沸え立て其中におとし入れる取合には割麩などよし

◎貝の柱吸物　貝のはしらをよく洗ひて能々水を去り椀に入れて清汁の沸え立ちしものをかける三葉は此の取合物に適す

◎鶉の吸物　鶉の吸物は日本橋木原店の中華亭の料理に名高し、鶉の吸物を製せんには、肉をたゝきにして、干椎茸に獨活など取合せ、常の清汁に仕立て、吸口は木の目又は柚子妙なり

◎獨活の吸物　太き獨活を一寸程宛にも切り、丸むきにしたるを充分湯煮にし、おろし大根を鹽すましと一所に鍋にかけ、右に調へ置きたる獨活を入れ、木耳などをあしらひとす

家庭の玩具及び繪畫

恕哉

予は家庭の談話に就きて、家庭敎育上最も愼重を加ふべき所以を本誌前號の紙上に於て陳述せしが、家庭の談話に次ぎて、家庭の敎育上忽諸に附すべからざるものは、家庭間に翫ばるゝ玩具及び繪草紙なりとす。」

聞く佛蘭西にては、嘗つて獨逸と兵を搆へて破れ、遂にアルサス、ローレン二州を割讓するの止むべからざるに遭遇し、其屈辱は今尚ほ佛國民の腦裏に深染して、家庭、學校、社會敎育の上に反映し來り、殊に家庭敎育に於ては、兒童に感化を與ふべき萬般の事物に注意を加へて、重もに愛國敵愾心の養成に心を用ゐ、各戶

に於て、或は武器、戰具を備へ付け、或は勇壯なる戰爭圖を貼り付けなどして、勉めて兒童の敵愾心を鼓舞し、復讎的精神の振興を計るに汲々たりと云ふ。

玩具及び繪草紙なるものは、時々その流行を改め、所謂社會の風潮なるものにつれて、或は理化學的應用の玩具を賞翫し、或は優美華麗なる繪草紙を嗜好する等の推移なき能はず、假令ば讀者倘ほ記臆するなる可し、一昨年彼の日清開戰の起るや、玩具店、繪草紙屋の趣向は頓に一變して、日清事件に關する事項となり、新を競ひ、巧を爭ふて以て時好に投ぜんことをこれ計り、其當時家庭間に弄ばるゝ玩具及び繪草紙は、洋劍短銃、軍帽、或は牙山の大捷、渤海々戰の圖等、如何に彼の無邪氣なる兒童の嗜好に投じて翫ばれしよ、其無心に遊戲し、談笑し、徒玩するの間、知らず識らずの裡に、其不調子なる口より發する處は、軍歌を眞似し、軍令を摸擬す『お母さん私は大きくなつたら軍人さんへお嫁に行くのよ』などゝ、ひたすら軍人にあらざれば、人にあらざる如き有樣にてありし、これ固より前號に記述せし、家庭の談話により感化を受けし處多して雖も、亦た家庭間に玩ばるゝ玩具及び繪草紙等も、亦た兒童感化の原因たらざるを得ず、故に家庭敎育上、家庭の談話に重きを措くと同時に、玩具及繪草紙等にも注意して、勉めて其思想を高尚にし、或は多少の考慮を要すべき物を擇まざる可からずと信ず。

夏の衞生の一つ

K．K

夏の衞生には衣服食物住居等いへば數々あれど、其中最大切なるは身躰の清潔ぞかし、凡て沐浴の身躰に効あるは今爰に述ぶるまでもなく、人々の古よりためし來りし事實にて、某醫師の說にも湯は腸窒扶斯に効あ

りといひ、またコレラ病の如きもカラシ湯に入るをよしとし、甚だしきは身躰内部の洗濯をすらなすやうになりぬ。かゝる次第なれば此頃の如く汗流れ身躰不潔になりやすき時節には別して必要の事とて、暇あり餘裕ある人には或は海水浴に或は温泉に思ひ〳〵に沐浴をなせども、忙しき人にありては知りつゝも怠りがちになるものなり、さりとてもし沐浴を怠らば誰も知る如く、皮膚よりたえず汾泌する排泄物毛穴を塞ぎて身も心も不快を感じ疾病の本ともなるべし。主婦の怠りは其身獨りに止まらず、引いて其子供に及ぶべければ深く心すべき事也。

さて其沐浴法につき或醫師の言に

湯　一歳より十歳までの小兒には一週間に一度は必らず沐浴せしむべし。温度は華氏の九十度を最も適當とす。もし是れにアンムニア水を加ふれば大によろし。五歳以下の小兒は腋の下股のあたり、たゞれ或は小さな腫物できやすきもの故、沐浴後直ちに天花粉やうのものをぬりおくべし。

十歳より十五歳位までは、温度は前に同じけれど、一週間に二度づゝ沐浴せしむべし。

此年頃よりは、入湯は寢につく前にするを最も効ありとす、然らざれば沐浴後冷水をかくるべし。

十六歳より二十二歳までは華氏の六七十度にて、一週間に一度入浴し。其他起床後各日に入浴すべし。壯健なるものは毎朝するも可なり。病人の沐浴につきてはいろ〳〵説ありて、何病と名のつく者は醫師のゆるしを待つべきも、疲勞等ならば適温の湯に浴し、三分間ばかりも靜かに身をしづめて少し睡氣ざしたる頃、目あらき手拭もて皮膚をつよく擦り、直ちに安臥すれば忽ち心氣爽快となる。

また身躰の下部はとき〳〵腰湯をなすべし。婦女子は殊に大切の事とす。

水は湯と異なりて神經機能を興奮せしむるものなり。されば身躰冷え、手足だるきものは、よろしく冷水浴を始めよ。さりとて餘り疲勞せしとき一時に水をかくるは、刺劇すぎて却てわろく。また冷水に浴するはじめ、タ―オルの如き大きなる手拭を水に浸し十五分か二十分間頭上にのせおけば逆上の患なし。總て沐浴は湯水にかゝはらず食後二時間をへだつべし。然らざれば消化機を害ふの慮あり。食後直ちに沐浴して命を失ひし人さへあれば、ゆめ〳〵忽に思ふべからず。

右の如く沐浴は衞生上有益なるのみならず、清淨にして快よく、皮膚を美にし、精神の活潑等是れに伴ふ利益少々ならず。

下女の待遇につき

K・K

少し身分よき人はさもなけれど、とかく我家の下女と相手になりてつまらぬ話をなし、或は何處其處の奥さん下女のうわさ話などする主婦少からず見受くるやうなり。料理や下宿屋のおかみさんたちならばよけれども、苟も一家の主婦として奥さんといはるゝ方々にして下女にふざけ、うちとけてかたらふは、誠に見苦きのみならず、主婦たるものゝ威嚴を損し家の品格を落すものなり。尤も婢僕といへども家族の一人なれば、心易く親しむべきは勿論なれど、主婦と下女とのへだてのかきをやぶりて、餘りに心やすだてすぎれば、家の秩序を亂す本となるべし。されぱたとへ下女いろいろと話しかけてもそれとなくとりとめ、話しかけさるやう屹としたるところありたきものなり。

牛乳嚥下の注意

牛乳を服みなれざる人も暖むれば嚥下する事を得べし然れ共之を一度にグッと嚥み乾すは大いに宜しからず何となれば牛乳は胃中に入りて凝固する者なれば一口に飲み乾せば大なる一塊となる故之を消化せしむしべき液躰の乳塊に浸入するに多時を要す故に其消化を終るにも多時を費す者なれば折角消化速なるを願ふて飲用せし牛乳も大に其消化時間を遅延せしむる者なり之に反して其小量宛を漸々に嚥下すれば胃中にて許多の小塊となるものなり故に液質の浸入するも速なれば自然其消化も速かなれば玆に於て牛乳の牛乳たる所以初めて明なり恰も固躰の食物を嚙み砕きて食すると其儘太呑にするとの差の如くなるものなれば大いに注意すべきとなりと或醫師より聞きたるまゝ(浦島太郎投)

流行の栞

流行子

夏の装具

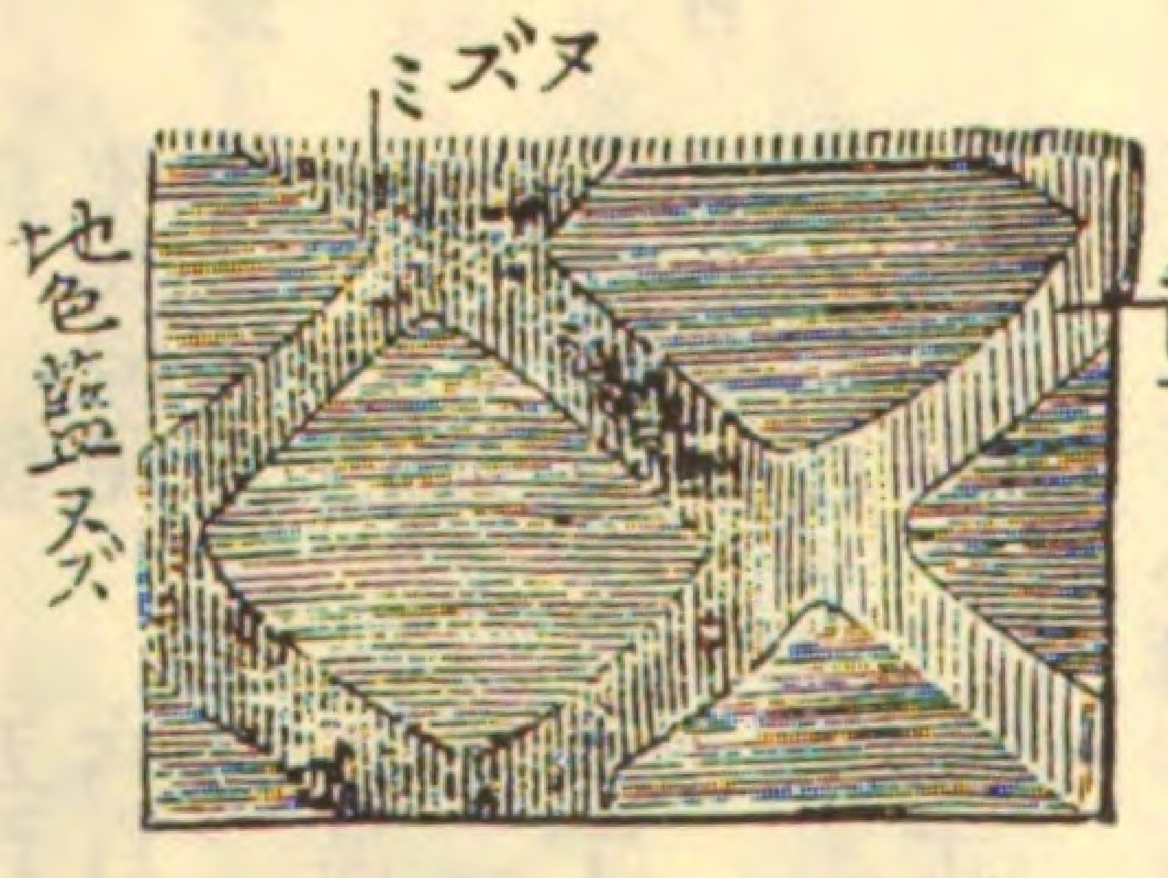
前號にも記載し置きたるが、尚ほ目新しき装具を挙ぐれば尾張町松田白牡丹本舗の工夫に成りし雪湖刀に係る白檀の櫛さ笄の如きは實に夏向の用品たるに適す、生地の香高きは色濃き嫌あり、香高からぬも生地の淡泊なるを可さす、次に亘齋の刀になるシャチ牙の生地に芝山の内にて翡翠の如きは生々さして頗る實際に迫る彫刻に見る所あり

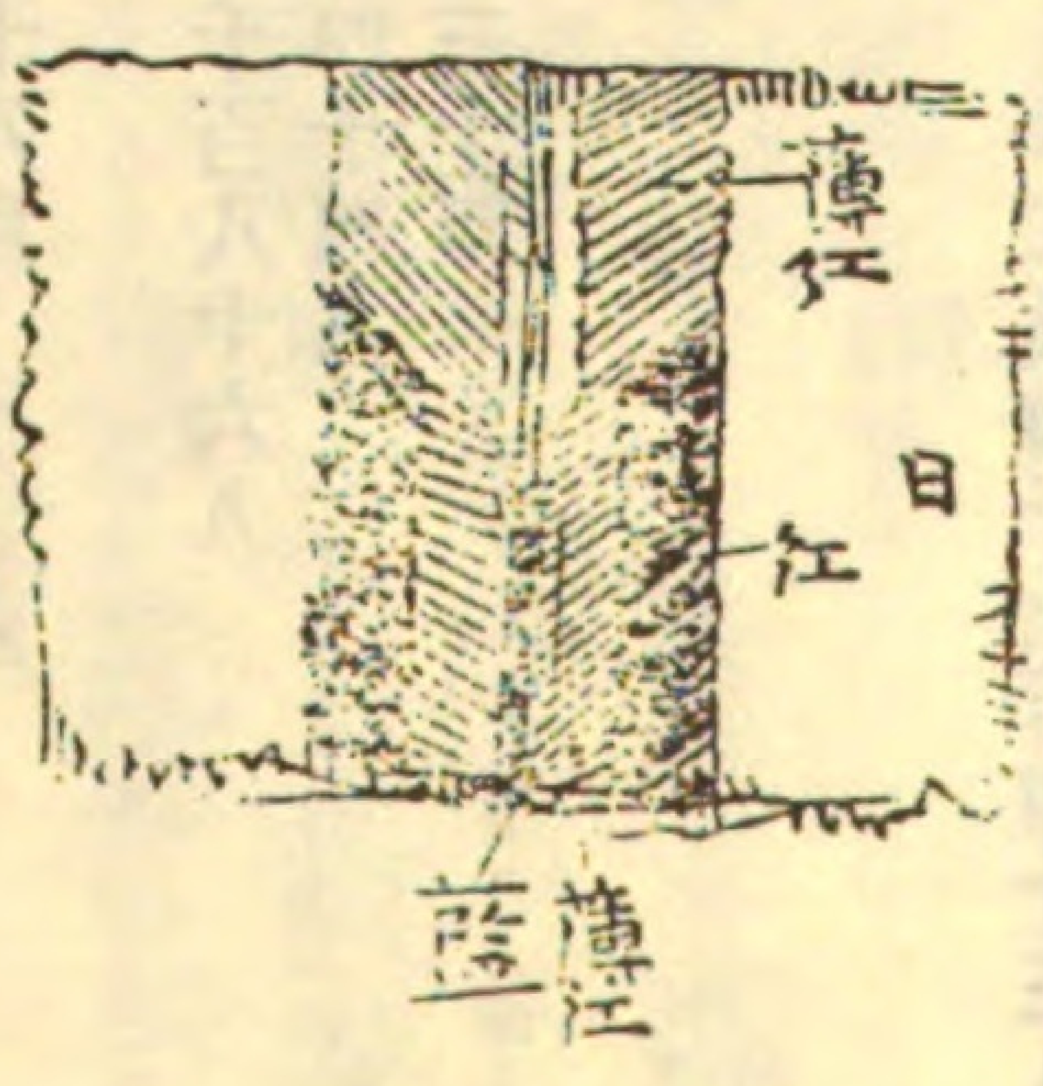
島田髷のかけものに金又は銀の板モール製流行し始む

たぼ止は鋼鐵製にて無地を第一さす、いろ／＼模様あるものは高等の嗜好にあらず、僅に下町の島田髷に見るのみ

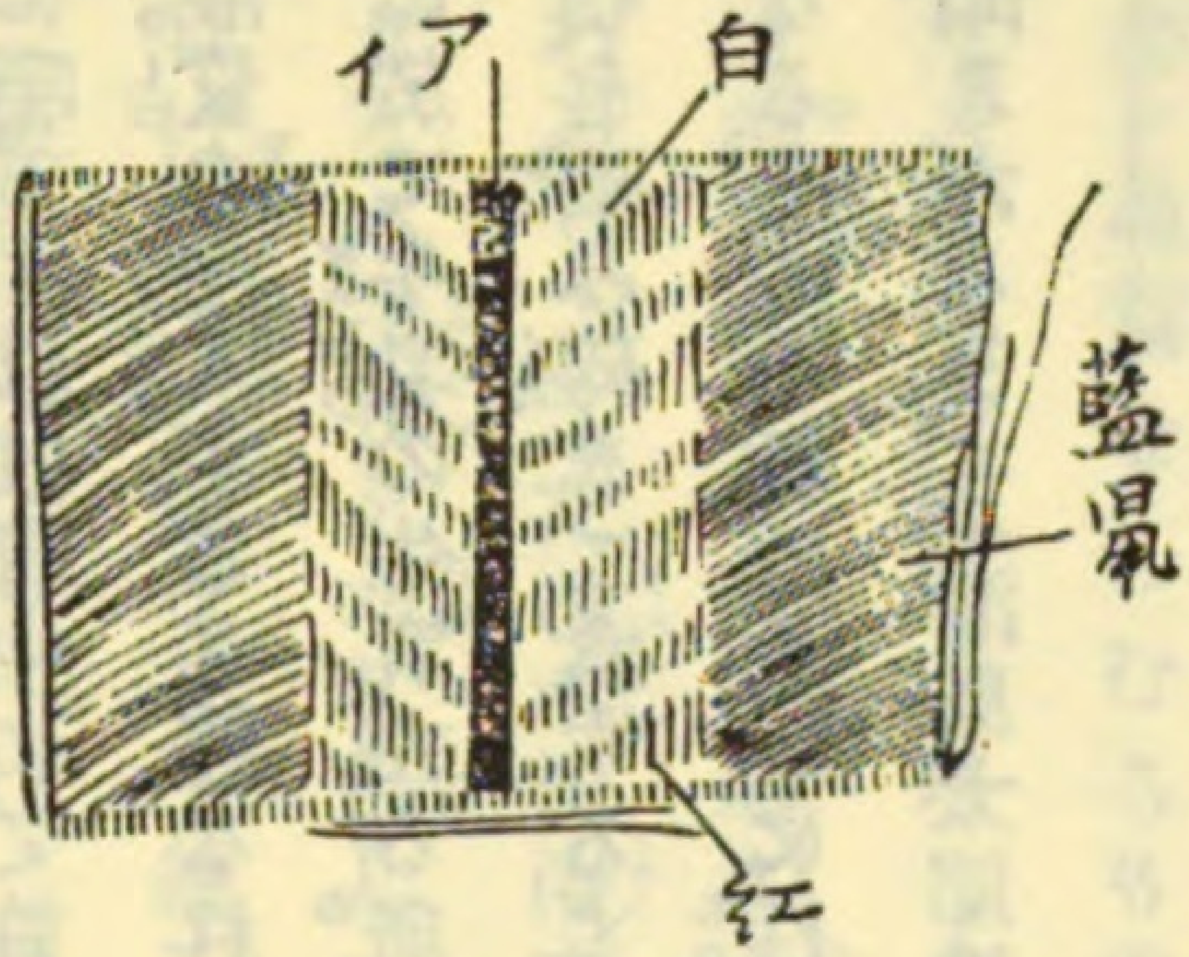
紋　子　ル

綿フランネルの織方日々に進歩して殆ご眞物にまぎれんさす圖





に示せるは西陣松屋町福井織工場より織出たるものなり、追々流行するなるべし、代價は着尺巾一反につき一圓内外なりさ

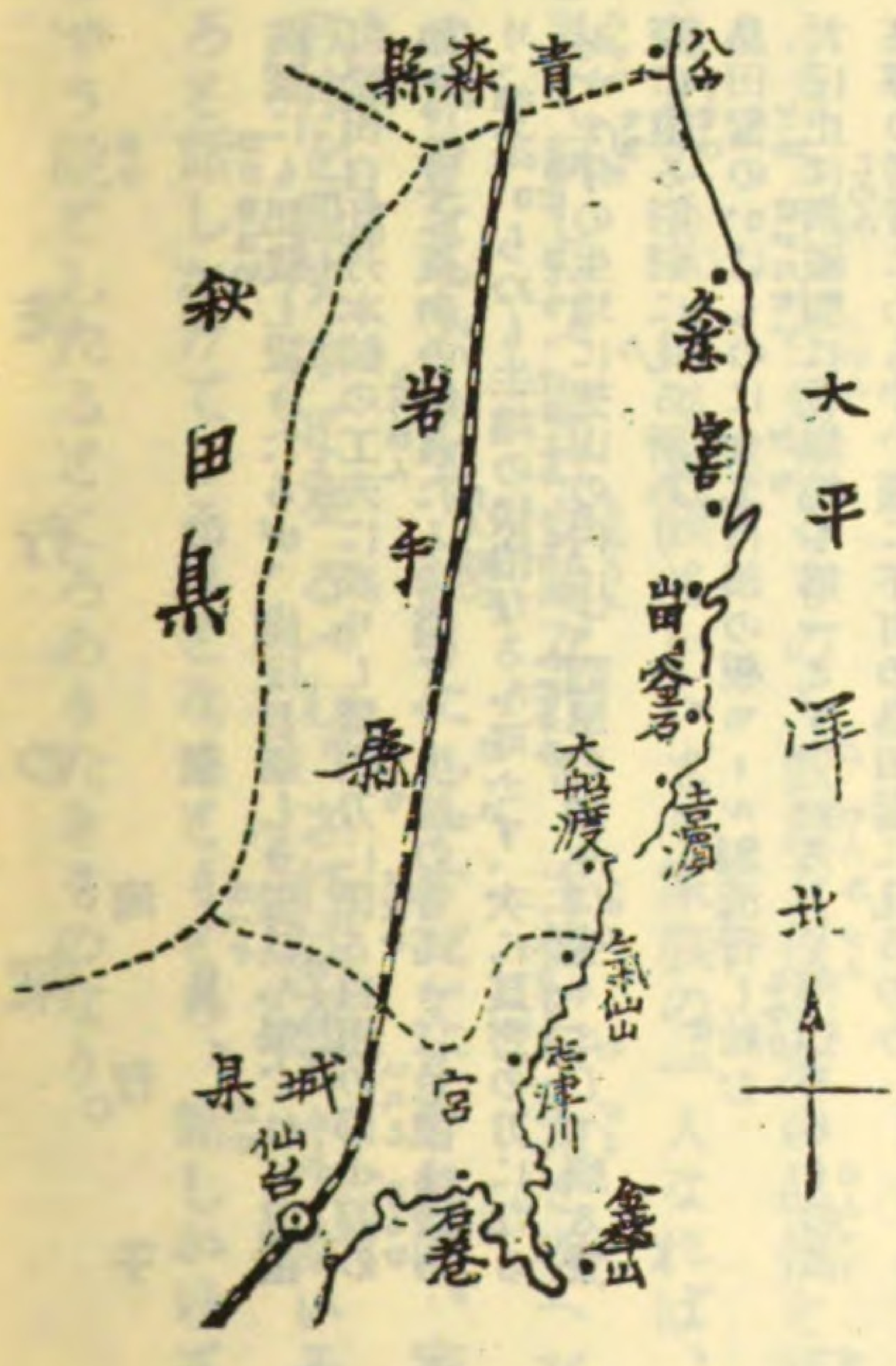


雜録

大珍事、大悲酸

宮城、巖手、青森三縣の沿岸には、本月十五日夜より十六日にかけて前代未聞の海嘯起り海岸を蕩盡し、村落を埋沒し生民を慘殺せしもの舉げて數ふべからず、過る二十日迄の調査に依れば

宮城縣	
死亡	二千五百五十七人
負傷	五百〇五人
流失家屋	六百八十八戸
巖手縣	
死亡	二萬二千百八十六人
負傷	千二百四十四人
流失家屋	五千〇三十戸
青森縣	
死亡	未詳
流失家屋	七十戸
其他	未詳
總計 死亡	二萬四千七百四十三人
總計 負傷	千七百四十九人
總計 流失家屋	五千七百八十八戸



此外精細の調査を終らば幾萬に上るも知るべからず、嗚呼悲酸の極、痛傷の極ならずや、天何ぞ三陸の民に禍するの甚しきや、吾人は茲に至りて天の無情を怨むの愚を甘んず



タスカロラ海床位置の畧圖

此の大海嘯の起りし原因はタスカロラ海床にあり、タスカロラは南米及び日本東海岸線の間に介在せる最も大なる水底断崖の海床也其位地は圖に示す

針線圏内にして世界の最深なる個處は針線圏内一帶の黒色を現はす處、其深さは二萬一千七百五十二呎より二萬七千九百三十呎に至り東北海岸線海嘯の主因たる大震は此深き海床に起るといふ

自働貯蓄銀行柱

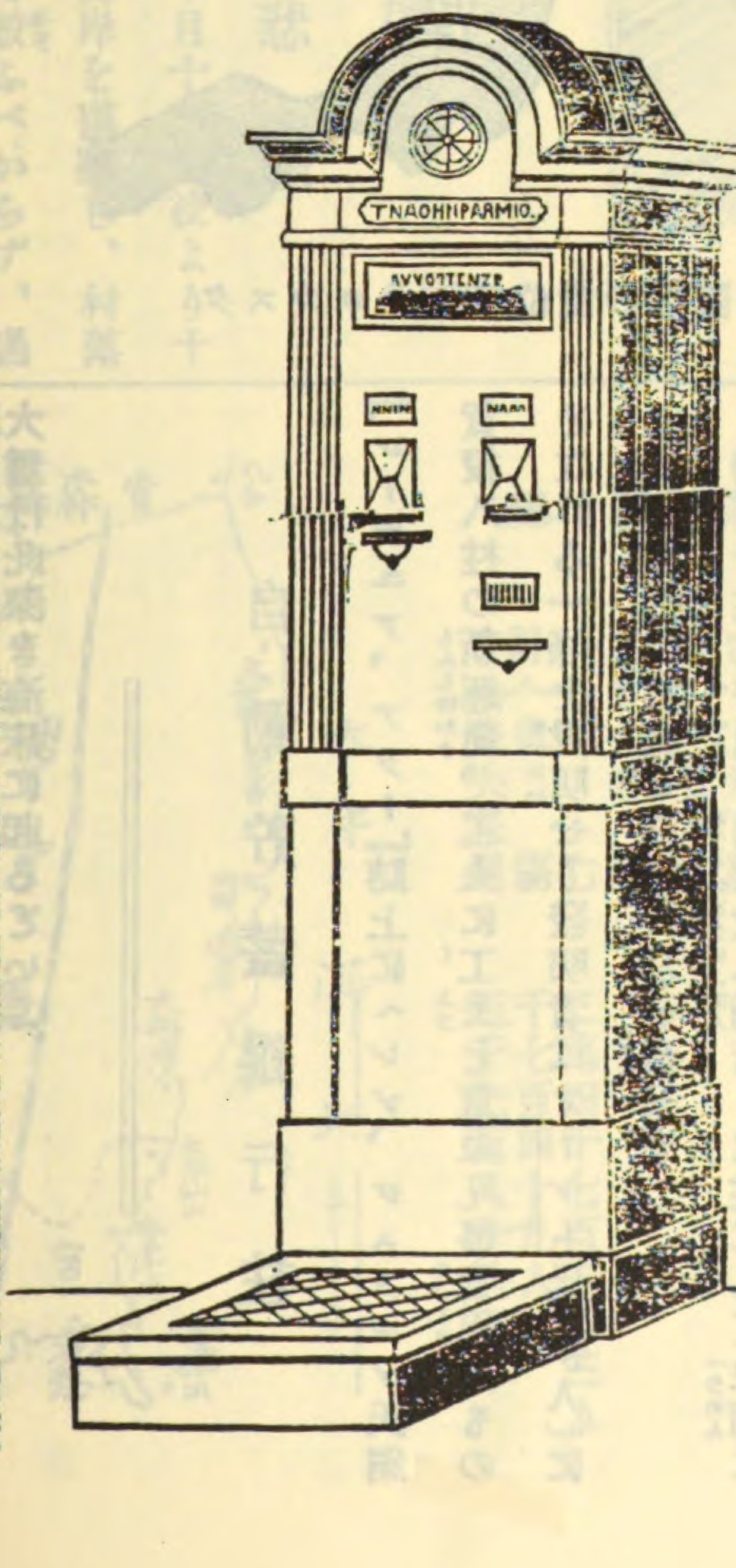
『レーヂユア、アワー』誌上にヘレン、ジムメルン氏銅貨投入柱の新趣向、工夫に工夫を重ね見事實用のものとなれる一條を説明せり發明者はアートム氏(伊人)にして伊太利に實施せられ成功を奏せり

自働銀行柱は普通の銅貨投入函若くは柱にして表面に三個の縦孔あり第一孔は銅貨を投入するもの、若し正貨に非ざれば柱内の機械に據り第二孔より自然に排出す正貨なれば函底の第三孔より正當の領收證を出すの仕掛なり此發明機械に據り下流の勞働者は毎日少額の

賃銀中より一錢を除き之に投入せば貯蓄銀行に到て貯蓄するの手數も要せず時限も徒費せず時限の制裁もなし何時にても勝手に最寄の銀行柱に投ずるとを得る便利調法のものぞかし預金者にして五枚以上の領收證を有する時は一定の貯蓄銀行の通帳と交換記入し四分利付にて元金とし預入るゝとを得

是等の銀行柱は一柱の價百三十五『法』なるが發明者アートン氏は奬勵の爲め一柱毎に五十『法』を寄附す

此銀行柱は伊國ミラン府に實施成果頗る佳良なれば今後全國中に傳播するの氣勢あり昨年の金融逼迫なるにも拘らず數個月間にて三個の銀行柱に投入せられし金額一萬二千『法』に上れり今や英國も亦伊國に倣て之を採用せんとするの議あり日本の如きも英に後れを取らず貧民貯蓄心奬勵の爲め直に實施せんとを望む

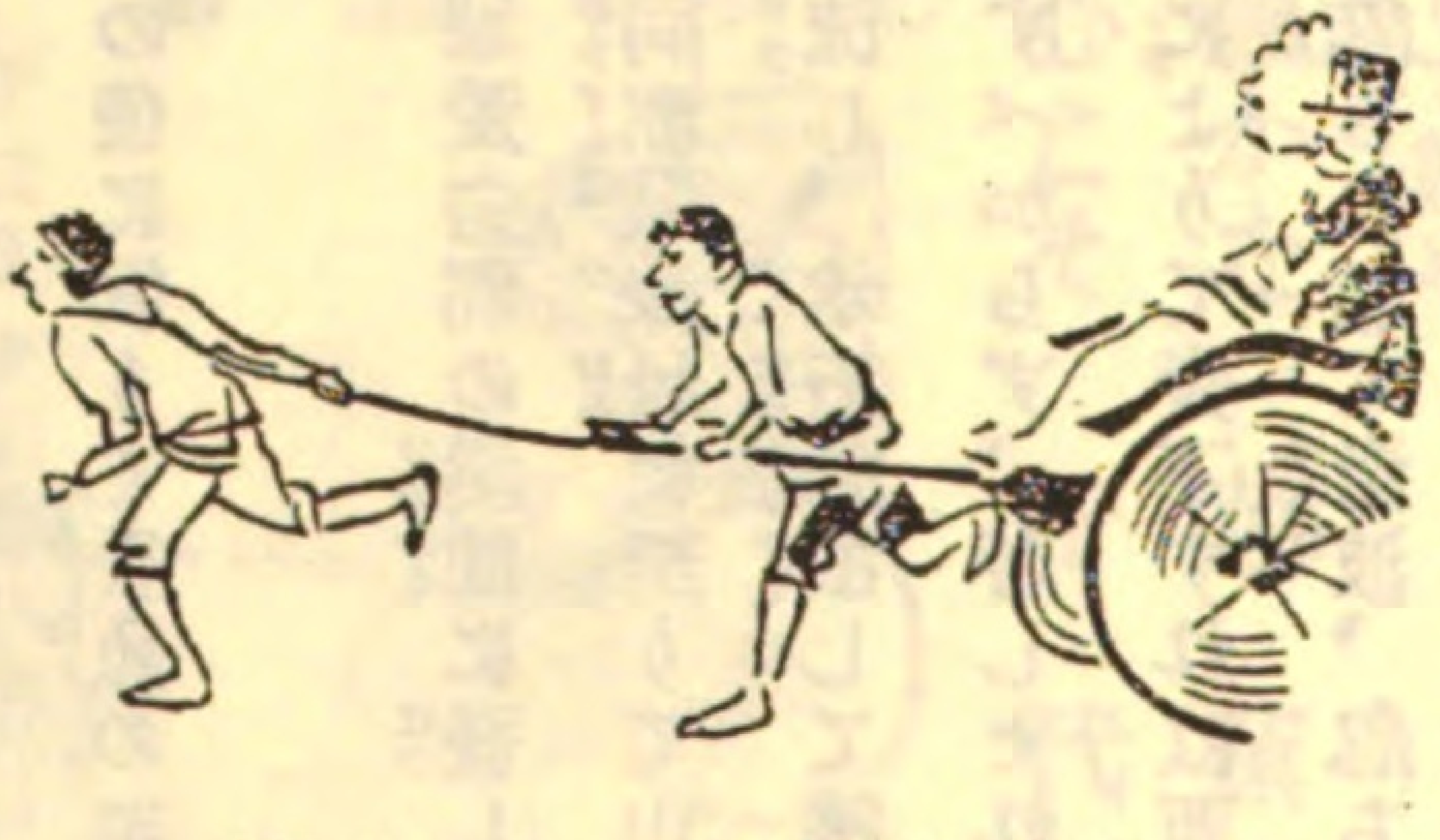


自働銀行柱

婦人の世界

○露國皇后　此たび莫斯科府にて皇帝と共に戴冠式

の主人となり玉ひし露國皇后アリクス陛下は頗る淑德ある婦人にて、此頃宮中女官を初め貴婦人社會に卷煙草流行するを心うとく思ひ、今後卷煙草を飲む婦人は、身のほとり近く寄せまじと嚴命せられ、其爲め頗る貴婦人社會の不人望を來せりと云ふ。同陛下は幼公主の哺乳など必ず自からし決して保姆に托せられずと云ふ。



金錢の勢力一（二人曳）

○勇敢なる少女　此程の事なりとか、那威より一艘の帆船上下十八人の乘組にて合衆國の方に向ひしに、頓て暴風起りて舟漏り始め、汲めども〳〵水は湧き入るに、一同弱り果てたる折、船長の娘にて當年十七になれる美少女ありけるが、絕へず甲板にありて水手を勵まし、之を勵まさんとて暴風の中に那威の古き唱歌舟歌など歌ひ、斯くて船沈まんとする頃やう〳〵漁船に助けられ、船に移りて初めて少女は歌を押へて泣きたりとぞ。十六人の水手は神の如く少女を讃美したりと。

○世界一の臺所　巴里の「ボン、マルシ」てふ料理屋は世界一の臺所をもてり。此處には四千人を使役し、料理のみに都合一百六十人の料理方間斷なく從事す。最小の藥罐にも一百クワルツを入れ、最大なるものには五百クワルツを容る。燒鍋の大さ、一個三百個のカツレツを入れ、斯るもの五十個あり。オムレツを作る時には一時に七千八百個の卵を要し、ポテトを炙る皿には二百二十五封度の馬鈴薯を入ると云ふ。

多摩川、保津川（口繪のゑとき）

多摩川は其源を甲斐のいざるが嶽に發し、同國北都留郡にては丹波川の稱を得、武藏國西多摩郡に入りて始

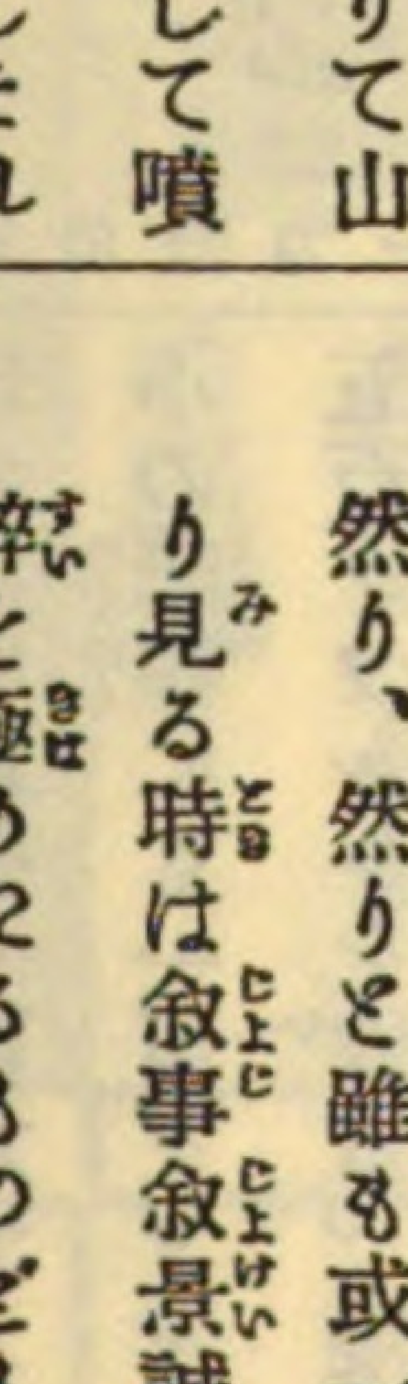
めて多摩川と名づけらる、尙東流して東京灣に注ぐ、則ち其下流は六郷川と稱し延長凡そ三十八里、日本六玉川の一にして和歌に所謂調布のたま川はこれなり、其水淸きを以て東京市内の飮用水と爲す每歲初夏の候に至れば東京地方より甲武鐵道の便に依りて香魚の遊漁に出かくるもの多し。

保津川は源を丹波北桑田郡及山城愛宕郡の溪間に發し丹波船井郡に入りて他流と合し同郡保津村に至りて山峽に入り奇石怪石起伏の間を奔流し、水石相激して噴沫四散、水煙飛迸の狀具に名狀すべからず、若しそれ輕舟を浮べ上流より一竿の操縱によりて奔下すれば西岸の景狀一瞬の間に變化往來、忽ちにして激波、忽ちにして巨巖、忽ちにして急灘、忽ちにして峯巒、悉く應接に遑あらず、數里の行程分間に過ぎ去り嵐山の麓大堰川の碧流に至りて萬象漸く靜なり

教訓の發句

俳諧堂主人

教訓の意を含める發句は其價値もとより上乘のものにあらず、されども一概にそを捨てゝ顧みざるは、又褒めた談にあらず、成程當代新進の諸俳士が口を揃ていふが如く、俗臭のふんぷんたるは實に然り、然りと雖も或一方より見る時は敍事敍景誠に其粹を極めたるものどもより優ると實に百倍、目に一丁字なき田夫野人も流石に詩形の小なるが爲たやすくこれを記憶して、或は己を修むるの栞、又は子弟を導くのたつきとなしつることの功多きに至りては論語孟子にも一步を讓らずと信ずるなり、たゞ支配する範圍の廣きに至りては所謂平民的文學の本能にして古來唯



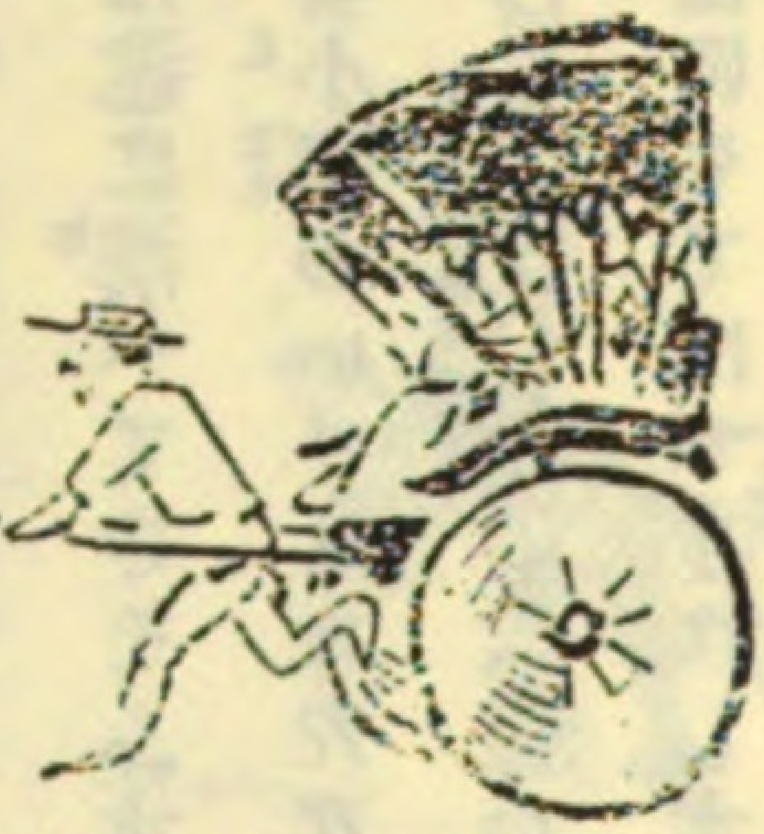
金錢の勢力二
(たかゝへ)

一、いつれが發句にまさるものぞ、茲に余がことさらに是等の句どもを紹介するの意は實に是が爲にして唯々家庭の金言ともいふべきものをいよゝ明かに示さんと欲するのみ決して〳〵先進の人々にいふにあらず、乞ふ其心して讀め、

夕顔や秋はいろ〳〵の瓢かな　芭蕉

百なりも蔓一筋の心こそ　千代

人は皆其初一様にして少しも區別なきものなり、然るに或ものは堂々國家の礎となり又は商界の大立物となり、上は其父母の名を顯はして孝道を全くし、下は人々に尊ひ敬はれて己が一身を安きに置き、以て充分の樂しみを盡すに引かへ、或ものは貧賤に陥り飢餓凍餒の事に苦み、はては知らず〳〵いとも耻づべきの罪を犯し、親兄弟には苦勞をかけ、己が身も亦寸分の安きを覺えざるに至る彼我の差別何ぞそれ甚だしき是皆心の持かたなり芭蕉は是を夕顔の花元一様に白く咲くも秋に至りては、なりいろ〳〵の瓢とたりつることにたとへて敎へ千代は百なりのふくべ大なるもあり小さきもあり、或は正しきもの又は曲くねたるものも皆一筋の蔓をはなれず、元是いづれも同根のものなりと戒む二句ともに『縁なる一つの草と春は見し秋はいろ〳〵の花にぞありける』といふ古歌とやゝ同一の趣あり。


金錢の勢力三（高い車貫）

居風呂の下や案山子の身の終り　丈草

雨乞の小町が果てや落し水　蕪村

古き支那の諺に、四時の序、功をなすものは去るとあり、春夏秋冬の景物、いづれも其時を過ぎぬれば消えて跡なきことたとへば春の花はやかで夏の若葉と代はり、三五夜中の眺は忽ちにして老女

の粧にたとへられたる凄じき冬の月となる、いづれも其榮の長く續くものにあらずといふの意なり、出來秋のかり入すめば且つて山田の守りとなりし案山子は居風呂の下にやかる、項羽亡んで韓信の切られたるに思ひあて丶考ふべし、神泉苑に雨を祈りし小野小町の全盛は遂に消へてさそふ水あればいなんとぞ思ふ卒塔婆小町のいともきたなき乞食となりしこと、假令へば旱魃六月の天、僅かに雨乞の祈りによりて得、世にもてはやされし水もはては秋の日の落し水となるが如し、前の句は『山田守る僧都の身こそかなしけれ秋はてぬればとふ人もなし』といふ玄賓僧都の歌の心後の句は『五月雨ほど戀したはれて今じや秋田の落し水』といふ近松門左衛門がざれ歌の面影、いづれも人間の榮花長くつゞかずといふの戒なり。

稻妻や昨日は東今日は西　其角

萍やけふはあちらの岸に咲く　乙由

世の人心の賴みすくなく、いづれも皆襟元につくは、實に稻妻の昨日は東今日は西と其日〳〵にかはるが如し、一身の外に味方なしと、古人の言葉も自から此句によりて思ひ出さる、取別けて後の句には面白きはなしあり、其作者は中川乙由とて伊勢の人なり、疾くより江戸に來りて俳諧を學び、當代屈指の人となりけり、然るに此人好色の心や丶深く或藝者の色に深くもなじみ、人の口にもかかる程に至りたり、或日乙由其女をつれて去る芝居を見物なし、其後の日は又己一人にて行きしに、其女今日は又或人につれられて來り、やゝ隔てたる棧敷にありしを見て大いに其輕薄の情をいやしみ、其時ぎり其女を思ひ切りし時の吟なり、



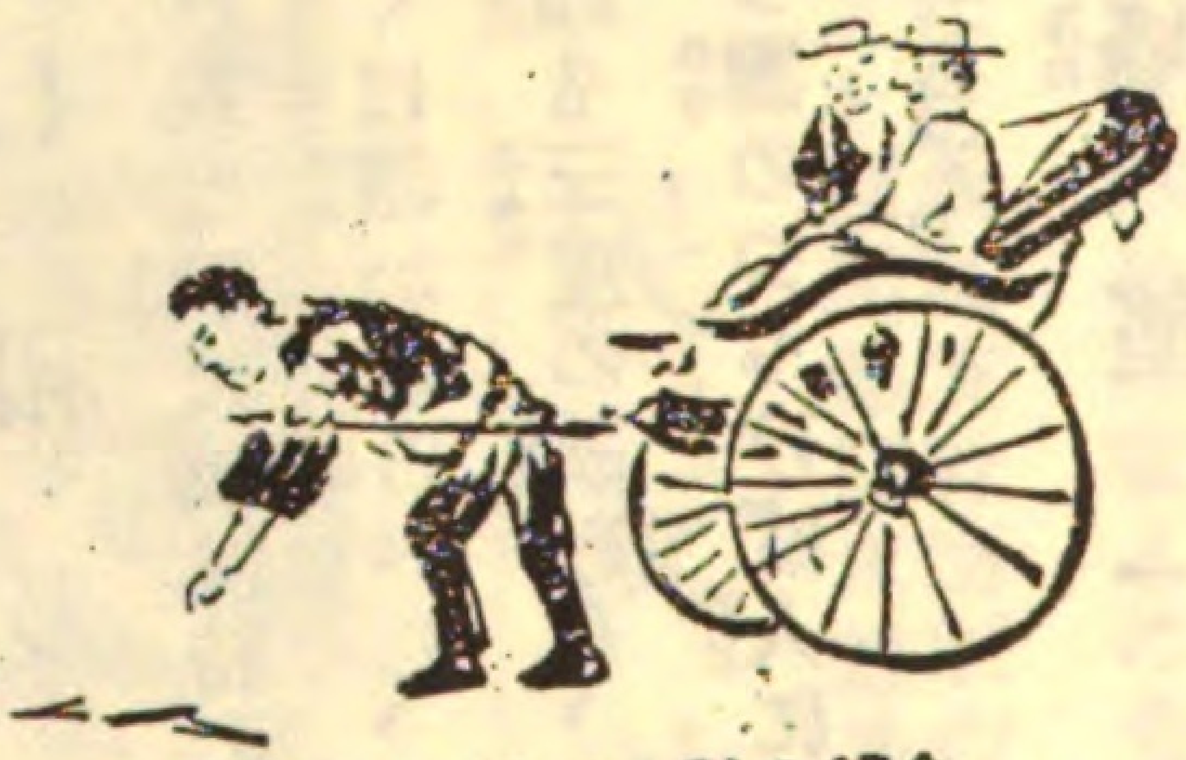
金錢の勢力四(安い車賃)

其角の句と同一の意なり。

空蟬となるまでなくを仕事哉　乙洲

香を持て掘起さるゝ芽獨活哉　來山

人間はすべて其能のために身に暇なし、書家は書の故に暇なく、畫家は畫の爲に忙はしく、文人は文によりて苦しめ、金持は金に使はること、却て無知無才無資の人の安きに若かず、そを乙洲は死に至るまで泣くと仕事とするの蟬にたとへ、來山は香の爲に掘り出さるゝ芽獨活になずらふ。



金錢の勢力五(二人乘)

交はりは紫蘇の染たる小梅哉　秋色

常に交はる所によりて遂に其本性を失ふ事假令ば青き小梅の紫蘇と共に漬られては其色に染まりて赤き梅乾となるに等し是につけても人は其交はる所を撰びし上にも撰ばざるべからず、されば幼きを育つる母が身にとりては其子の爲に注意してゆめな小梅を赤くならしむことなかれ、孟母三遷の敎などいふ事くわしく思ひ合すべし。

けむくとも頓て寢安き蚊遣哉　不角

不角とは江戸の發句師にして元祿年中の名人なり、其子何某とやらんいふもの或方へ聟養子となりて行きしに其養母誠にむつかしき女にして家の内更に面白くなきまゝ遂に出でゝ歸り來りしかば、此句を作りて戒めたりかやり火のけむくとも暫しせば蚊の去りて寢易きが如く如何につらくとも後には其家の主となりて大に樂しき日もあるべしといふことなり、何事につけても人間は兎角辛抱が肝腎なり。

初茸や人にとらるゝ鼻のさき　去來

人のあらはよく見えて我身の事の見えざるは實に鼻のさきなる茸の却て人に取らるゝが如し、岡目八目といふ事は即ち此意なり、汝人の目にある塵を見て汝の目にある梁を知らざるは何ぞやといへる基督の致などよく〲合せ考ふべし。

初雪の續かば人にあかるべし　和　及

はつ雪と大いに人に持て囃され或は歌に或は詩に其美を歌はるゝとも決して長くは續かざるべし、誠に珍しき内が花にして佛の顔も三度の歎あり、人に交はらんものは必ずやはつ雪のつゞけば人にあかるべきの戒を守ざるべからず。

毬程があれになりけり雲の峰　望　一

小さきものゝ段々と見る〲内に大きくなること誠に其初まり程の大いさなりし村雲の段々と大きくなりて遂にはいかめしき雲の峰となるに等し小善といへども積り〲ては遂に大善人となり小惡といへども屢々すれば遂に大惡の人となるされ ばこそちりも積りて山となるとはいへり。

社告

本社主筆徳富猪一郎愈々客月二十日を以て横濱出帆歐米漫遊の途に上り候に就ては彼地にて觀察致候各國、各地、各都至る所人情風俗及生活の眞相特に家庭に關する事情は細大漏さず一々通信を以て舊に倍し執筆を勉め愛讀諸君に孤負せざらんことを期し申候今後本紙に如何なる新生面を開くかは紙上にて御覽被下度候也

次回歌題

撫子
池邉
窓前竹
惜別

明治廿五年九月十四日遞信省認可

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍印刷

復刻版 家庭雑誌 第2回配本（第6～11巻・別冊1）

1987年1月10日 発行

定価 108,000円

発行者 船橋 治

発行所 不二出版㈱
東京都文京区本郷5-28-3
〒113 ☎03(812)4433

印刷所 ワールド印刷

製本所 吉田製本工房

乱丁・落丁はお取り替えいたします。